

松代城跡(3)

——流域松代幹線系花の丸汚水準幹線事業地点——

2009年3月

長野市教育委員会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、様々な人々の営みが積み重ねられています。地下に残されている数々の歴史の痕跡は、先祖の知恵と文化を今に伝える貴重な財産となります。

松代藩真田家の城下町であった松代は、武家屋敷や町屋、神社仏閣などの歴史的町並みが残っており、往時の景観を今に伝える城下町として知られています。平成16年度には、国史跡である松代城跡の復元整備完成を契機として「エコール・ド・まつしろ」の取り組みが始まりました。エコールとは、フランス語で学校を意味します。松代城跡や江戸時代の藩校である旧文武学校、城外御殿である新御殿（旧真田邸）など、様々な文化財が残る松代全体を学校ととらえ、松代で遊びながら学んでもらおうという試みです。松代では、趣味や専門を活かした様々なおもてなし活動を通して、文化財を市民が中心となって守りながら活用していくという気風が生まれつつあります。

このたび、流域松代幹線系花の丸汚水準幹線工事に伴い、記録保存を目的とした松代城跡の発掘確認調査を実施しました。ここに長野市の埋蔵文化財第124集として刊行いたします本書には、調査によって得られた遺跡の詳細を掲載しております。調査成果は、連綿と綴られてきた松代の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました近隣住民の皆様、当該工事の施工を請け負われた建設業関係者、そして報告書刊行に至るまでご支援、ご指導を賜りました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げます。

平成21年3月

長野市教育委員会
教育長 立岩 睦 秀

例 言

- 1 本書は、長野市松代町松代における開発事業「流域松代幹線系花の丸汚水準幹線工事」にともなう埋蔵文化財松代城跡の確認調査報告書である。
- 2 調査は、長野市水道局下水道建設課長からの依頼により長野市教育委員会（文化財課埋蔵文化財センター）が実施した。
- 3 発掘調査地は長野市松代町松代16～47、265～277地先（市道松代西23・24・25・26・27・28・29・30号線）に位置する。
- 4 調査は遺跡の記録保存を目的とするが、起因事業である下水道管布設工事の掘削幅が狭いため、施工掘削時に当センター職員が立会い、随時埋蔵文化財の遺存状況を確認すると共に、堆積土層や検出遺構について、適宜図化・写真撮影等の記録保存をはかる保護措置がとられた。
- 5 調査期間は平成20年5月12日から9月18日、調査面積は1,060㎡である。
- 6 遺跡の測量は、株式会社写真測図研究所に委託した。遺構図中の座標・標高は、平面直角座標系の第Ⅷ系座標値（日本測地系2000）と、日本水準点の標高に基づく。
- 7 現場における遺跡の確認調査は、青木の指導のもと宿野が担当し、塚原・小林（由）が補助した。整理調査および本書の編集は、宿野・小林（由）が担当し、各調査員・作業員が作業を分担した。本書の執筆においては、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ章を宿野が、第Ⅲ章を小林が分担して執筆した。
- 8 遺跡から出土した遺物は、遺跡の略番号「MSCG」を用いて注記を行い、遺構図版類とともに長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

序

例言

目次

第Ⅰ章 調査と経過	1
第1節 発掘調査に至る経過	
第2節 調査体制	
第3節 調査日誌抄	
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	4
第1節 歴史的環境	
第2節 松代城の歴史概要	
第Ⅲ章 調査成果	7
第1節 調査の方法	
第2節 調査の概要	
第3節 出土遺物の概要	
第Ⅳ章 結語	27
第1節 花の丸御殿の推定位置	

図 版 目 次

図1 松代城跡位置図	1	図8 Ⅲ区遺構調査図(1)	13
図2 松代城跡周辺遺跡分布図	4	図9 Ⅲ区遺構調査図(2)	14
図3 松代城縄張想定図	6	図10 Ⅱ区出土遺物(Ⅱ-①区)	19
図4 調査区分図	7	図11 Ⅱ区出土遺物(Ⅱ-①区)	20
図5 調査区全体図	10	図12 Ⅱ・Ⅲ区出土遺物	21
図6 Ⅰ区遺構調査図	11	図13 花の丸御殿推定図	28
図7 Ⅱ区遺構調査図	12		

第I章 調査と経過

第1節 発掘調査に至る経過

開発予定地は、市道松代西23・24・25・26・27・28・29・30号線に位置する。同地は、松代城跡花の丸周辺に位置し、『松代城跡整備実施計画』の整備方針において、「史跡指定範囲外の旧城郭域についても指定地を拡大・公有化し、保存活用をはかる」区域にあたり、『新御殿跡整備基本計画書』においては平成19年度より公有地化を進める「第一次史跡拡大区域」に該当する。平成17年以降、史跡の保存整備担当部局である教育委員会文化財課が、花の丸における下水道建設事業・排水路改修工事の事業主体である水道局下水道建設課・建設部河川課と保護協議を重ねたが、現段階では史跡指定地拡大（公有地化）の早急な事業実施が困難な状況であり、住民の生活権を保護する観点から、下水道等建設事業実施の政策判断がなされた。そのため、工事に伴い記録保存として埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。埋蔵文化財センターでは、一連の協議経過を受け、先行して実施される下水道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査についての保護協議を進めた。平成19年12月13日には、文化財保護法第94条第1項の規定による「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書」が提出され、平成20年2月6日付け19教文第19-226号にて長野県教育委員会教育長より記録保存のための発掘調査実施の通知がなされる。平成20年2月29日に「埋蔵文化財発掘調査依頼書」、「土地所有者の承諾書」を受理し、埋蔵文化財発掘調査の実施に至った。調査は工事掘削に伴い、平成20年5月12日から9月18日までの130日間に渡って断続的に実施され、調査面積は1,060㎡に及んだ。

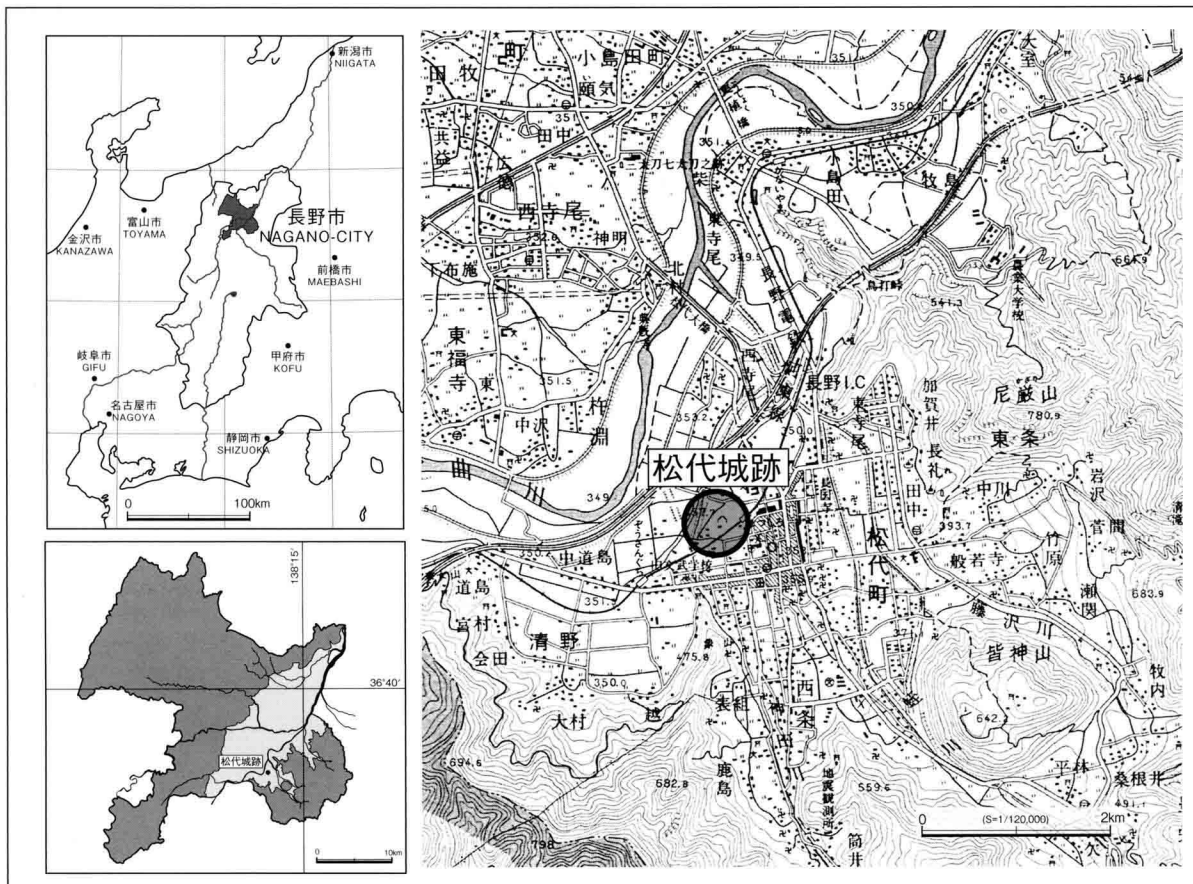


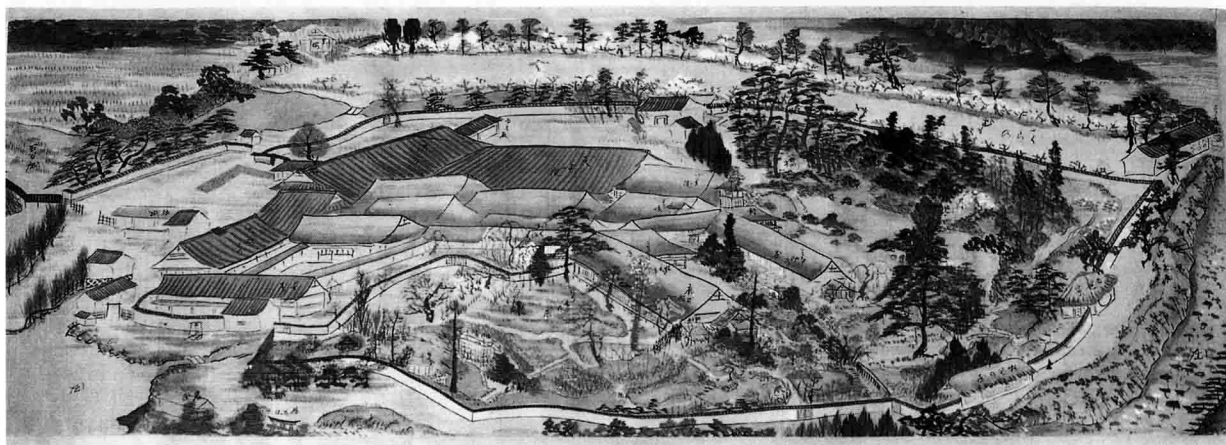
図1 松代城跡位置図

第2節 調査体制

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	立岩 睦秀
総括管理者	文化財課	課長	雨宮 一雄
総括責任者	埋蔵文化財センター	所長	青木 和明
庶務担当		係長	宮澤 和雄、職員 吉村 久江
調査担当		主査	小林 和子
		主事	宿野 隆史（調査・編集担当） 塚原 秀之（調査担当）
		専門員	遠藤恵実子、山野井智子、柴田 洋孝、 向山 純子、小林 由実（調査・編集担当）、 小山 夏奈、西澤 尚紘
整理調査員	青木善子、池田寛子、鳥羽徳子、中殿章子、武藤信子		
整理作業員	倉島敬子、小泉ひろ美、清水さゆり、関崎文子、富田景子、西尾千枝、 三好明子、村松正子		
測量業務委託	株式会社写真測図研究所		

発掘調査および整理調査を通じて、下記の方々、関係機関より数多くの貴重なご指導・ご助力を賜った。

調査協力者	長野市教育委員会文化財課	係長	飯島 哲也、	専門員	海野 修
	松代文化施設等管理事務所	係長	原田 和彦、	主事	松下 愛
	長野市立博物館	係長	降旗 浩樹		



〔曲大直小図〕（真田宝物館所蔵）

第3節 調査日誌抄

2008（平成20）年

- 3月10日 調査区全体測量開始
- 3月31日 調査区全体測量完了
- 5月12日 I区確認調査開始
- 5月31日 I区確認調査終了
- 6月2日 II-①区確認調査開始
- 6月11日 外堀石垣検出（II-①区）
- 6月12日 II-①区確認調査終了
- 6月25日 III-②区確認調査開始
- 7月2日 III-②区確認調査一部完了
- 7月8日 II-②区確認調査開始
- 7月10日 II-②区確認調査一部完了
- 7月14日 III-①区確認調査開始
- 7月18日 III-①区確認調査一部完了
- 7月22日 II-②区確認調査再開
- 7月25日 II-②区確認調査終了
- 7月30日 II-③区確認調査開始
- 8月8日 II-③区確認調査終了
- 8月11日 III-①区確認調査再開
- 8月20日 III-①区確認調査終了
- 8月22日 III-②区確認調査再開
- 8月25日 III-②区確認調査終了
- 8月27日 III-③区確認調査開始
- 9月18日 III-③区確認調査完了、現場における作業を終了する。



工事状況



調査状況

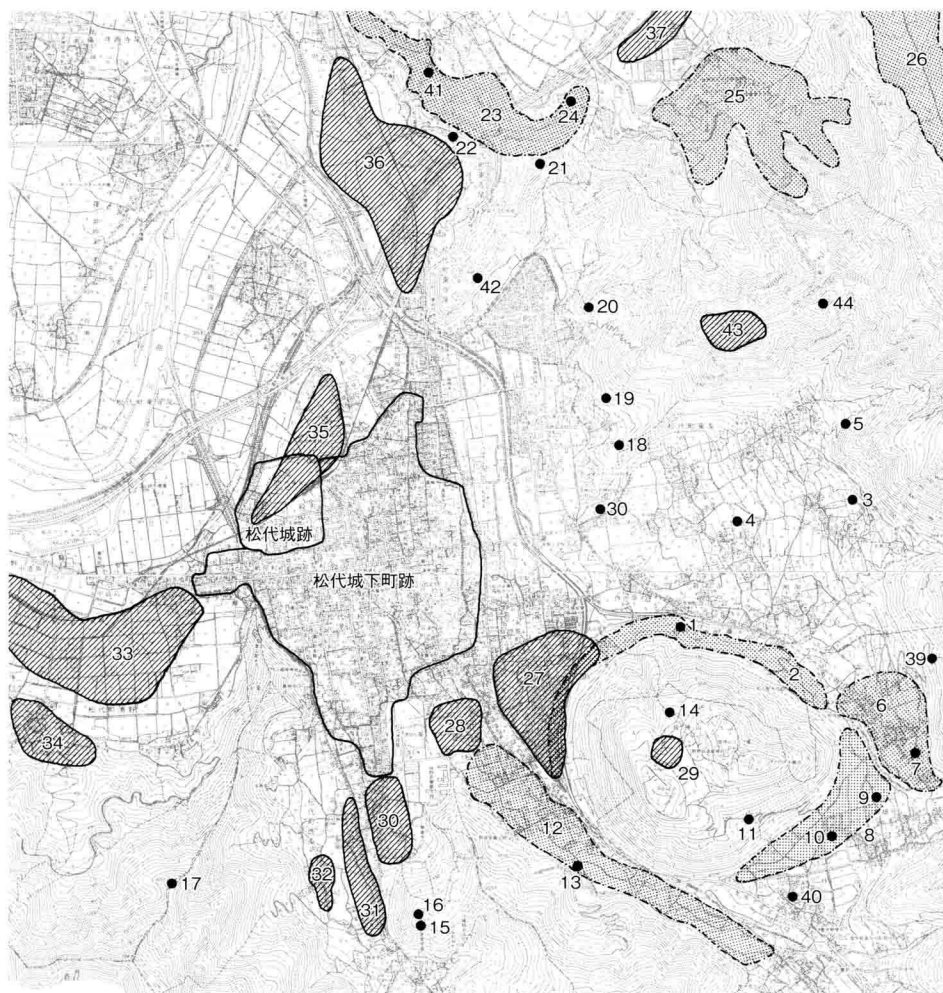
◎調査工程表

調査区	詳細	2008（平成20）年							調査日数	調査面積
		3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月		
全体	測量	■								
I区				■					20日間	240㎡
II区	II-①区				■				11日間	340㎡
	II-②区					■	■		7日間	
	II-③区						■		10日間	
III区	III-①区					■	■		15日間	480㎡
	III-②区				■			■	14日間	
	III-③区						■		23日間	

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 歴史的環境

歴史的環境 真田10万石の城下町である松代町は、背後に母袋山（標高977.5m）、高遠山（標高1208m）、奇妙山（標高1529.1m）などの東部山地を控え、神田川・蛭川・藤沢川などによって形成された複合扇状地上に位置している。扇端部は非常に緩やかな傾斜で、上記の3河川は天井川となって千曲川氾濫原に接している。千曲川の自然堤防上には、東寺尾の松原遺跡や清野の四ツ屋遺跡など弥生時代中～後期の拠点集落が存在し、平安時代まで継続することが確認されている。また扇状地の扇中央部には、中条遺跡や屋地遺跡などの古墳時代中～後期を主とする小規模な集落が存在し、周囲の山地からは古墳時代中期の大型円墳や前方後円墳、後期の群集墳などが確認されている。また山頂部には、尼飾城跡、寺尾城跡などの中世山城も多数分布している。



- 1 西前山古墳
- 2 皆神山北麓古墳群
- 3 菅間王塚古墳
- 4 竹原笹塚古墳
- 5 熊の沢古墳
- 6 牧内古墳群
- 7 牧内1号墳
- 8 桑根井筒塚古墳群
- 9 桑根井空塚古墳
- 10 桑根井筒塚1・4号墳
- 11 南大平古墳
- 12 虫歌宮崎古墳群
- 13 宮崎古墳
- 14 小丸山古墳
- 15 舞鶴山1号墳
- 16 舞鶴山2号墳
- 17 母袋山古墳
- 18 天王山古墳群
- 19 長礼山古墳群
- 20 加賀井古墳
- 21 北平1号墳
- 22 松原1号墳
- 23 大室古墳群金井山支群
- 24 大室古墳群第466号古墳
- 25 大室古墳群北谷支群
- 26 大室古墳群大室谷支群
- 27 屋地遺跡（弥生～中世）
- 28 中条遺跡（弥生～中世）
- 29 皆神山遺跡（縄文）
- 30 市場遺跡（弥生～平安）
- 31 中村遺跡（縄文～平安）
- 32 鹿島遺跡（縄文）
- 33 四ツ屋遺跡（弥生～平安）
- 34 大村遺跡（弥生～平安）
- 35 松代城北遺跡（古墳～平安）
- 36 松原遺跡（縄文～中世）
- 37 一等牧遺跡（古墳）
- 38 天王山窟跡（平安）
- 39 牧内窟跡（平安）
- 40 平林館跡（中世）
- 41 金井山城跡（中世）
- 42 寺尾城跡（中世）
- 43 尼飾城跡（中世）
- 44 城裏城跡（中世）

図2 松代城跡周辺遺跡分布図

第2節 松代城の歴史概要

松代城(海津城)の築城 松代城は、甲斐の武田信玄(晴信)と越後の上杉謙信(長尾景虎)による「川中島の合戦」(1553~1564)の際に、武田側の北信濃攻略の前進基地として築城された海津城がはじまりとされる。永禄3年(1560)9月23日付けの武田信玄印判状には、武田家家臣の内田監物の「海津在城」が記されており、その頃にはほぼ完成しており在城衆が詰めていたことがうかがえる。築城当初の海津城については、『甲陽軍鑑』や『真武内伝』など後世の編纂物に記述がある一方、当時の古文書・絵図等の記録は無いため、詳細は定かではない。

石垣築造と城の改名 慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いの後、徳川幕府のもと全国的な規模で城の整備が行われる中、海津城には森長可の弟の森忠政が入り、二の丸・三の丸の整備が行われたと伝えられる。この頃本丸土塁が石垣に築造し直されたと考えられているが、石垣の整備については須田満親の時とも田丸直昌の時ともいわれており、定かではない。また、森忠政は、兄の旧領地であり、遺恨の地でもある川中島を希望して拝領しており、「百姓共我を待らん」として城名を「海津城」から「待城」に改めたと伝えられる。しかし、その「待城」の名も、松平忠輝が城主として入った慶長8年(1603)には名前の一字をとって「松城」と改められた。城は松平忠輝の改易後、松平忠昌、酒井忠勝の居城となり、元和8年(1622)8月に真田信之が上田から移封された。この時から明治の廃城までの約250年間、松代藩を治めた真田氏が松代城を居城とした。現在の国史跡指定名称である「松代城」に城名が改められたのは、正徳元年(1711)、松代藩真田家3代藩主幸道の時といわれる。

寛保の洪水と千曲川の瀬替 松代城は、本丸北側が千曲川に接していることもあり、たびたび洪水による被害を受けた。中でも、寛保2年(1742)、5代藩主信安の時の大洪水は戊の満水とよばれ、石垣、橋、堀の崩落、堀の埋没等甚大な被害報告がなされている。同年11月付けの修復願絵図(『信濃国川中島松代城石垣築直堀浚窺絵図』)では、それぞれの被害箇所修復を願い出るとともに、堀の浚渫についても併記されている。また、領内での被害も甚大で各地に史料が残っている。6代幸弘は、この洪水の後、千曲川の河道を北方へ移すため、大きく2度にわたって普請を行なった。この大普請は明和7年(1770)頃には完了していたようであるが、これと前後して御殿を本丸から花の丸へ移すこととなる。

花の丸御殿の造営 三の丸西側に位置する花の丸では、享保の火災以後居宅として利用されていたとみられる。寛保の水害後、宝暦年間にはたたみ置きなどに使用されるが、御殿の普請は明和5年(1767)から始まり明和7年(1770)には完了する。以後廃城まで、政務の場、藩主の居住の場として本丸御殿に代わって花の丸御殿が利用されることとなる。花の丸御殿は、嘉永6年(1853)9代幸教の時、失火により焼失する。安政元年(1854)には再建されたが、裏向までの再建にはもう8年の歳月を要し、万延元年(1860)にようやく完成した。

明治初年の松代城 明治2年(1869)の版籍奉還後、真田幸民が松代藩知事に任命され花の丸御殿が藩庁舎となるが、城地は軍事的施設としての機能を失っていった。真田家文書の「御城地御処分之事」には、本丸・二の丸の畑地としての利用や堀の撤去、石垣や土塁の保存など十箇条が記されており、当時の城地利用方法が伺える。花の丸は、明治4年(1871)の廃藩置県により松代県庁となるが、放火によって明治6年(1873)には焼失している。明治8年(1875)に城地が家禄奉還の士族等に払い下げとなると、土塁の削平や堀の埋め立てが進んだとみられ、城地全体が桑畑として利用されるようになった。

本丸跡地の保存と整備 城跡の状況を嘆いた真田家は、明治19年(1886)以降、本丸跡地の買収につとめ、明治33年(1900)までに本丸の全域を取得した。その後松代城跡の本丸は、明治37年(1904)に遊園地として一般開放されるようになった。その際、町民ら有志によって本丸内や石垣上に松や桜などが植えられ、桜の名所とし

て知られるようになっていった。城地の本丸部分は、昭和39年（1964）に県の史跡になり、さらに昭和56年（1981）には旧城郭域の一部と新御殿を加えて国史跡の指定を受けるに至った。一方、花の丸については、宅地化の進行によって城郭景観が失われており、史跡指定範囲の拡大および埋蔵文化財の保全をはかることが求められている。

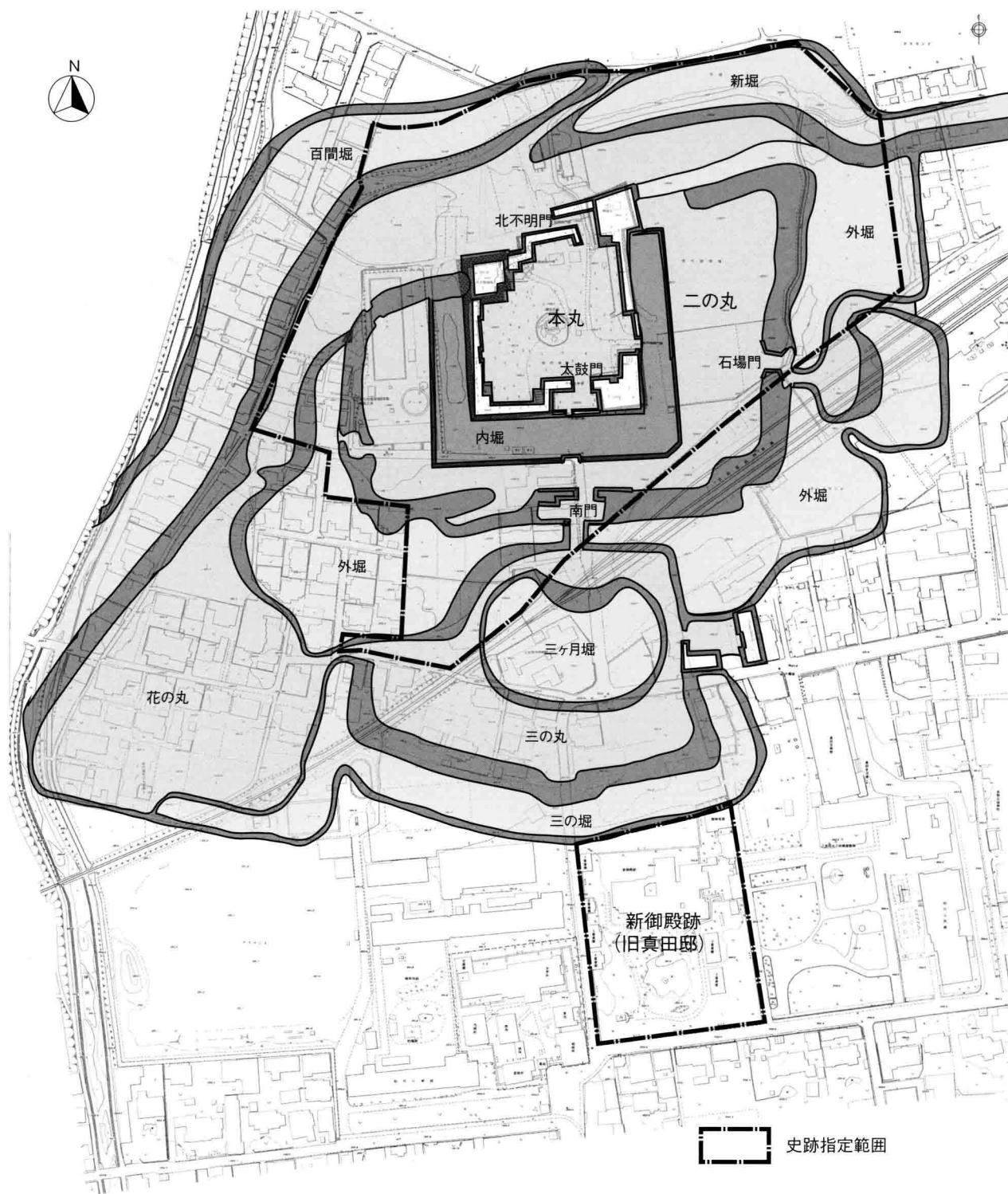


図3 松代城縄張想定図

第Ⅲ章 調査成果

第1節 調査の方法

調査は平成20年5月12日より9月18日までの130日間にわたって実施した。調査にあたっては、施工範囲が幅1.5～2mと狭小であることから、①重機掘削、②埋蔵文化財遺構確認、③下水道管布設の順で施工と同時並行して確認調査を進めることとし、堆積土層の断面確認を主目的とした。堆積土層断面は、3～5mごとにセクションポイント（SP）を設けており、本調査では116地点で計測をしている。また、石垣等遺構検出においては、別途立面図等を作成している。

調査地は、既存道路の広範囲にわたっているため、便宜上調査区を3区に区分する。Ⅰ区は調査地西端の北東の軸を有する道路であり、花の丸外延部あるいは百間堀の土塁想定ラインにほぼ並行するものと思われる。Ⅱ区は花の丸北東の外堀想定地に位置し、堀想定範囲は周囲よりも1m以上低い窪地であることが視認できる。Ⅲ区は三の丸から花の丸へと続く道路であり、基本的に江戸期の花の丸曲輪内に該当する。なお、調査にあたっては事前に道路両肩約2m毎に測量点を落とし、検出遺構及びセクションポイントの基準とした。

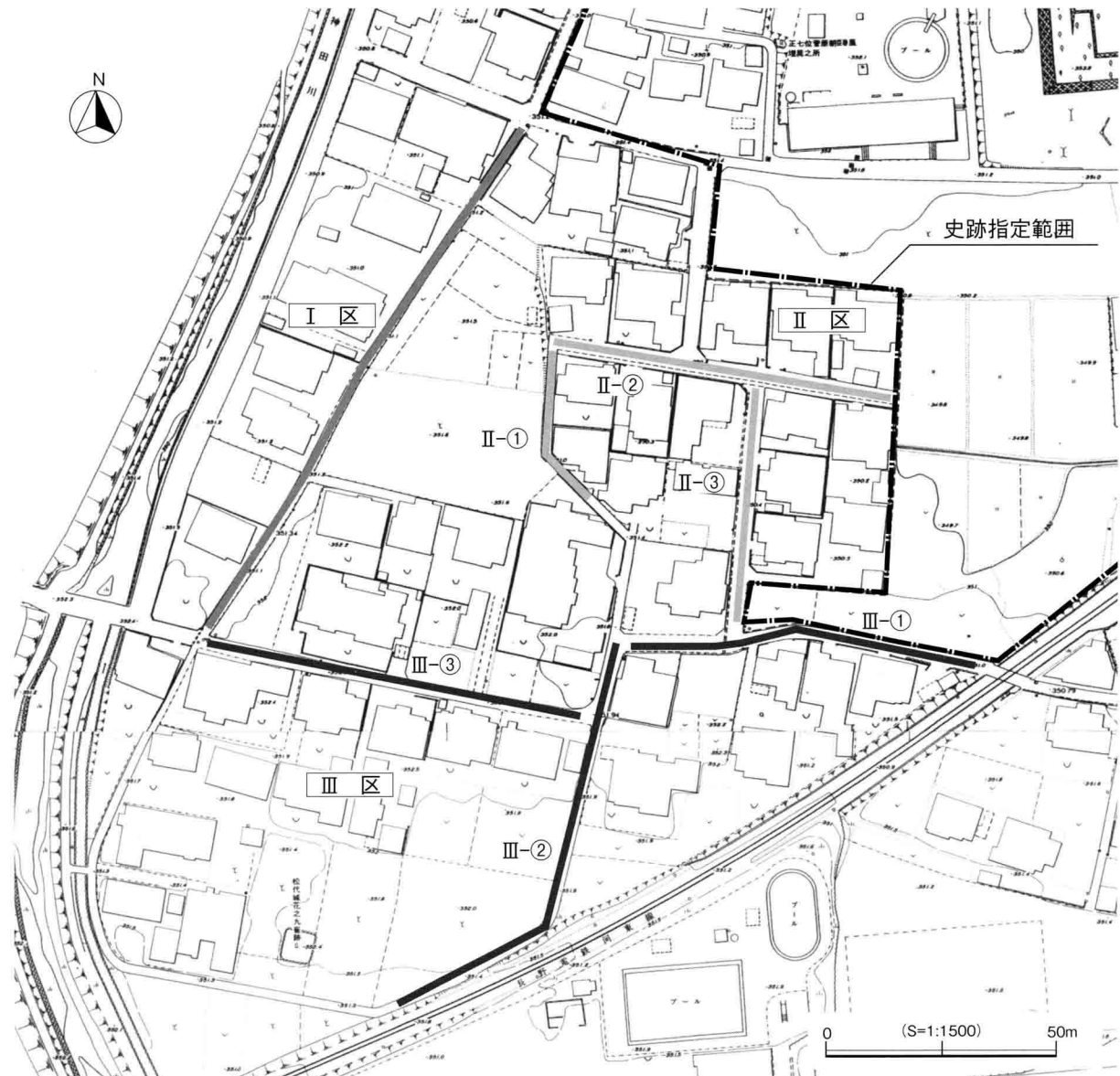


図4 調査区分図

第2節 調査の概要

(1) 全体概要

調査概要 松代城跡は昭和60年度から史跡環境整備事業の一環として発掘調査が実施されており、これまでに調査成果や絵図史料から城郭の縄張りが想定されている。調査地は、松代城跡の南西部にあたり、旧城郭域の花の丸およびその周辺に位置する。調査は既存道路内への下水道管埋設工事であるため、道路路盤工や既存埋設管などによって遺構の大部分が消失しているものと予測されていた。調査では、既存埋設管による攪乱も一部確認されるものの、比較的良好な状態で城郭遺構を確認することができた。今回の調査では、花の丸御殿礎石、外堀石垣など、これまで確認されていない新たな遺構を検出することができ、宅地化している現況においても埋蔵文化財が良好に遺存していることが判明した。以下、調査区毎に検出遺構の概要を示す。

(2) I 区の調査概要

二の丸北西土塁 本調査区西端に位置するI区では、建物遺構等は確認されていない。堆積土層は、近代改変が現地表下1.2~1.3mまで及んでいるものの、その下層には均質な褐色砂層が堆積する。この褐色砂層は、百間堀と接する松代城跡二の丸北西土塁（水除け土手）基底において確認されている砂層と類似しており、百間堀と接する土塁もしくは旧千曲川河川敷の自然堤防堆積砂と推定される。また調査区中央部のSP2・SP7では、褐色砂層が西側へ落ち込む状況を確認しており、百間堀および旧千曲川へと落ち込む部位と推定される。

花の丸曲輪との境界 調査区中央よりやや南よりのSP12では、地表下約140cmの最下層から灰褐色や赤褐色の粘土ブロックを多量に含む土層が堆積する状況が確認された。またSP15では地表下60cmから暗褐色土が堆積しており、SP12を境に大きく堆積土層が異なる状況が看取できる。このことから、SP12付近は百間堀に接する水除け土手と花の丸曲輪との境界地点であるとともに、花の丸の曲輪造成時に人為的な盛土が施されている状況が推察される。

(3) II 区の調査概要

II 区の概要 本調査区は、ほぼ全域が松代城跡の外堀に位置しており、堀想定範囲内の地表面は、周囲よりも約1~2m低い窪地状の地形を呈している。調査・施工は、大きく3区分して実施された。II-①区は、東側に大きく下がる地形変換点を南北に走る道路であり、外堀接岸部にあたると想定される。II-②区は周囲より約2m程低い地形を東西に横断しており、外堀中央部にあたると思われる。II-③区はII-②区の中央より南に延びる調査区であるが、地形は南に向けて徐々に高くなっており、調査区の北端と南端とでは、約1.2mの高低差が認められることから、調査区南端は花の丸曲輪部と想定される。堆積土層は、外堀想定部では現地表下約1mまで近代の改変を受けており、その下層は多量の泥炭を含む堀堆積土となる一方、花の丸曲輪想定部では褐色の盛土が確認される。堀の護岸部では、木杭や石垣の一部が検出されている。

検出された石垣 幕末の城内を描いた「海津城内真景図」では、外堀のうち花の丸御殿との接岸部のみに石垣が描かれており、調査でもII-①区の南端において高さ約1.2mの石垣を検出した。検出された石垣は、北に面を有し、外堀と直交する形状を示すが、嘉永4年（1851）の「曲大直小図」においては、同位置に花の丸御殿庭園の泉水とつながる水路が描かれており、検出された石垣はこの水路導入部の御殿側の岸部にあたると想定される。石垣内部の盛土からは17世紀末~18世紀末に比定される肥前系の陶磁器が出土していることから、明和

年間の花の丸御殿造営にあわせて本石垣が構築された可能性が推察される。またⅡ-③区の南端においても、石積み遺構が確認されているが、こちらは盛土内の出土陶磁器から、明治期以降の石積みと判断される。ただし、堆積土層はこの石積みを境界として大きく異なり、北側が堀堆積層であるのに対し、南側では盛土層となる。また石積みより3.9m北部において護岸用木杭を検出していることから、旧花の丸曲輪の接岸部が、この近代石積みの周辺であった可能性は高い。

(4) Ⅲ区の調査概要

Ⅲ区の概要 本調査区は、花の丸曲輪想定地を縦横断しており、Ⅱ-③区と接して花の丸曲輪から三の丸曲輪までの東西に延びるⅢ-①区、Ⅲ-①区西端より南に延びるⅢ-②区、Ⅲ-②区の中央やや北よりから西に延びるⅢ-③区に区分できる。Ⅲ-①区の西側では現地地表下約60cmより黒褐色や灰白色の粘土ブロックが混じる褐色粘性土が確認できる。この粘性土は、これまでの調査で確認されている松代城跡二の丸土塁の構築盛土と類似しており、人為的に盛土・造成したものと判断できる。盛土は花の丸曲輪の東端部まで確認されることから、千曲川の自然堤防を基盤として利用しながら、自然堤防東側に盛土をし、花の丸・三の丸の曲輪を形成した状況が推察される。

三の堀と外堀 Ⅲ-①区西部では、調査区南壁において多量の炭化物を包含する焼土層が、東西幅約10mの範囲にわたって厚く堆積している状況が確認された。この地点は、明治7年(1874)に記された「花ノ丸御殿払下地割図」と比較すると、外堀南端部に近接するものと思われる。江戸時代に描かれた縄張図では、三の丸と花の丸とを結ぶ通路は細く、三の堀と外堀によって筋違いの形状を呈していることから、幕末から明治初期の火災後に外堀の一部を埋め立てた状況が推測される。また、Ⅲ-②区南端部では盛土および流土は確認されず、堆積土層は近代造成土のみとなるが、この近代造成土より北のSP56・SP57では石積状の石材が検出されている。この調査成果を「花ノ丸御殿払下地割図」と比較すると、調査地点は水堀の位置にあたり、花の丸東部を囲む三の堀の一部と推察される。三の堀は鉄道線路によって南北に分断されており、堀の形状を留めていないことから、敷地払い下げ後の比較的早い段階で埋没した可能性が考えられる。

建物礎石 Ⅲ-②・③区では、1辺30～50cm、厚さ20cm程度の建物礎石と想定される石材が複数検出されている。礎石は現地地表下110cm前後に集中しているものの、現地地表下60cm前後でも確認されている。Ⅲ-②区ではSP43,48,53,54地点において、またⅢ-③区では、SP95,97,99,102地点において礎石状の石材が検出された。礎石は自然石および一部加工石材を使用しており、上面に平坦面を有している。堆積土層からは、現地地表下60～70cmと100～110cmに炭化物を多量に含む焼土層を確認しており、現地地表下110cm前後にて検出される礎石は、焼土層に覆われている。花の丸の火災記録から、下層を嘉永6年(1853)の火災、上層を明治6年(1873)の火災にともなう整地層と想定されるが、出土遺物が少なく推測の域を出ない。これらの調査成果に万延元年(1860)の「花之丸御殿向御普請図」を重ねると、礎石位置は御殿の建物範囲とほぼ一致することから、花の丸御殿の建物礎石と推察される。

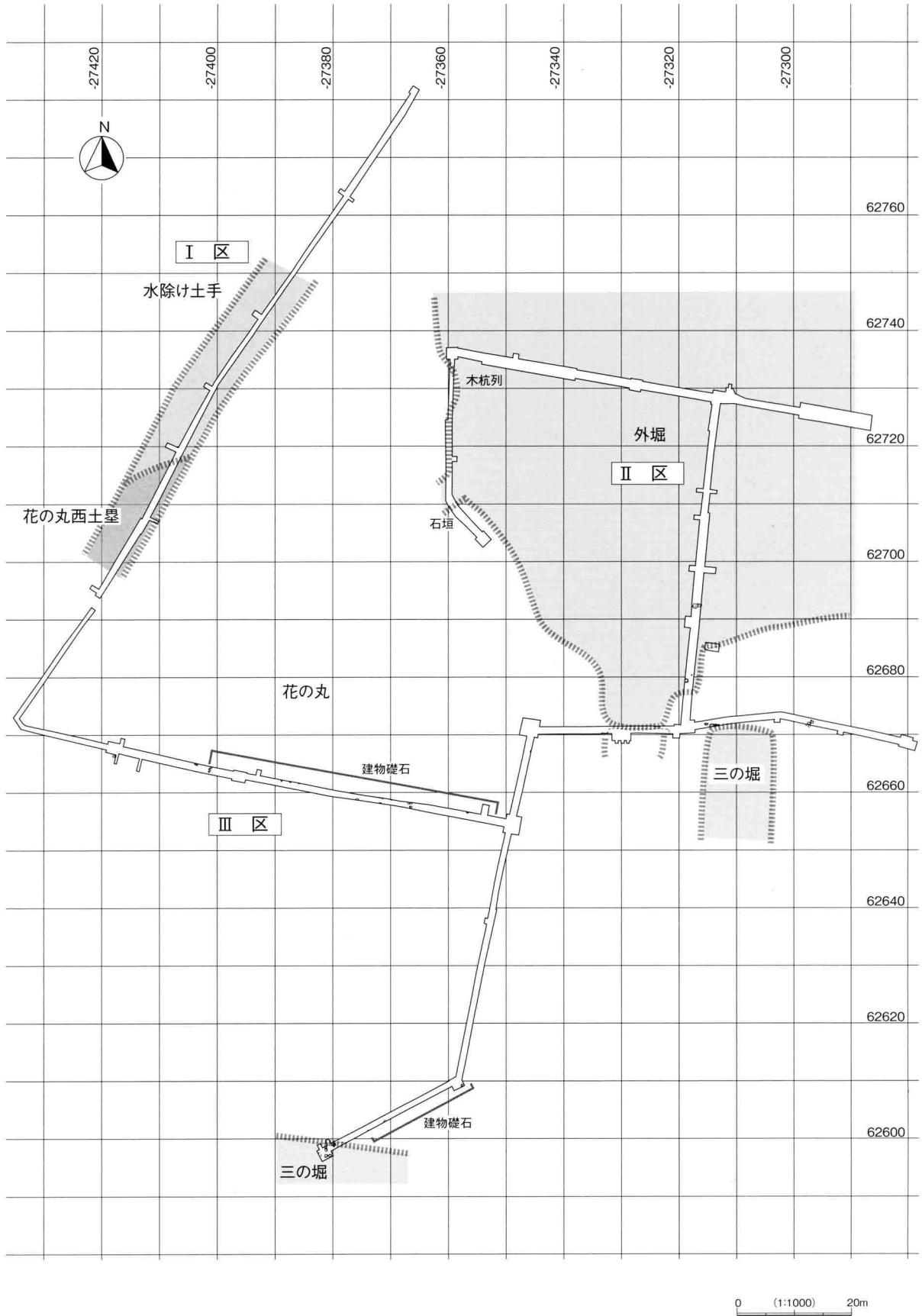
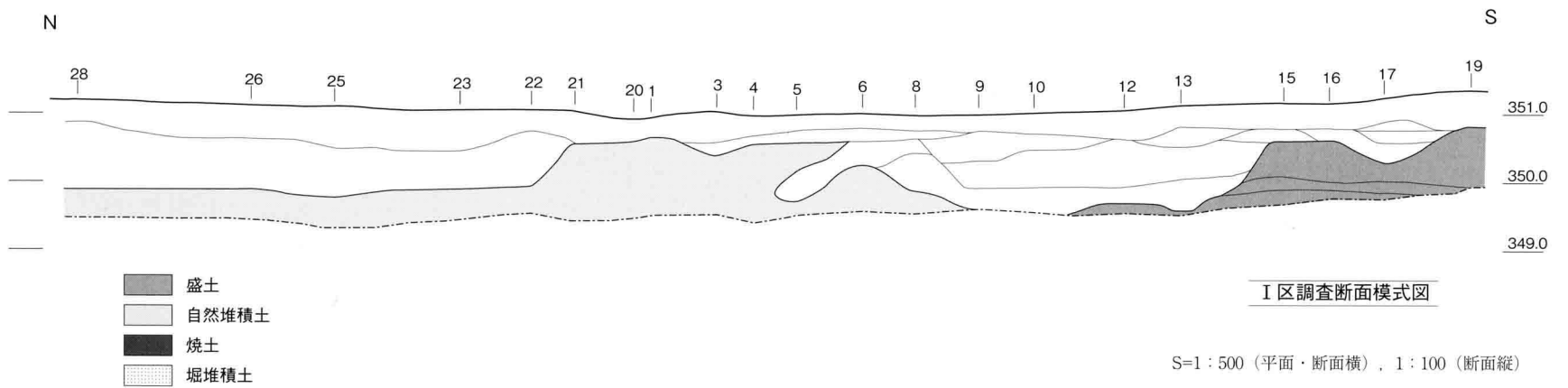
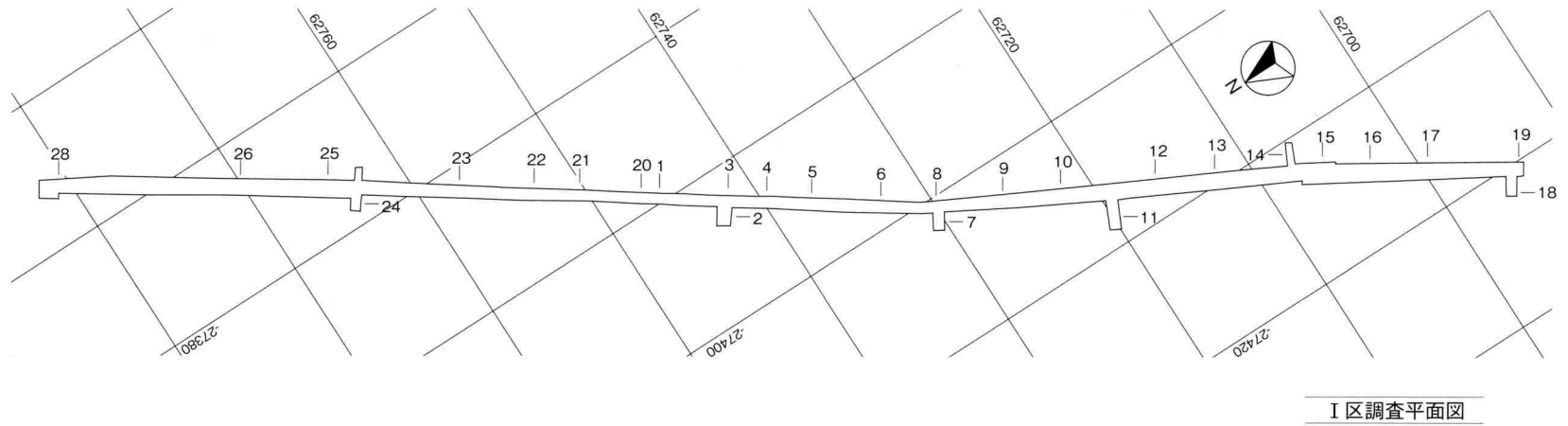
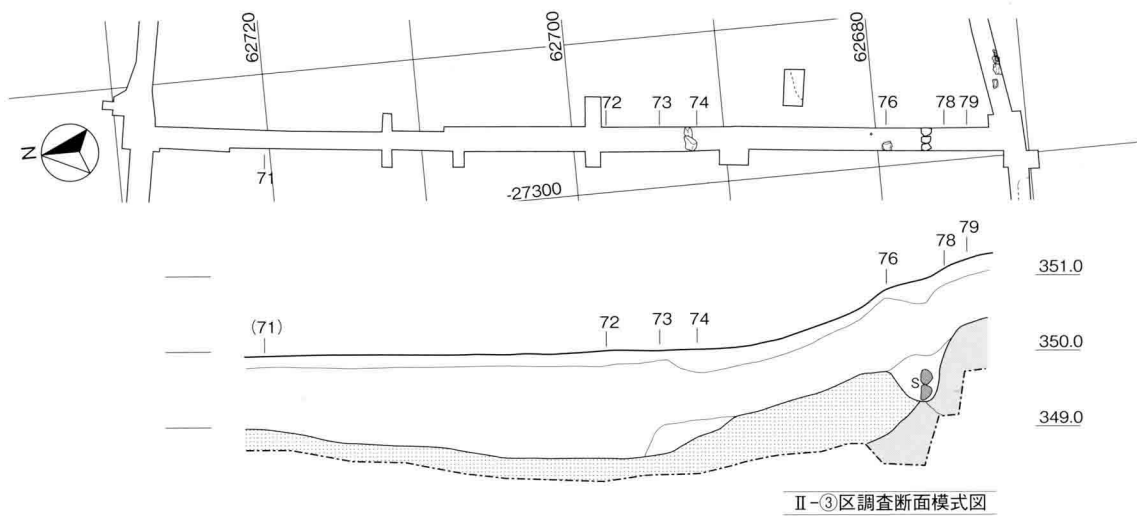
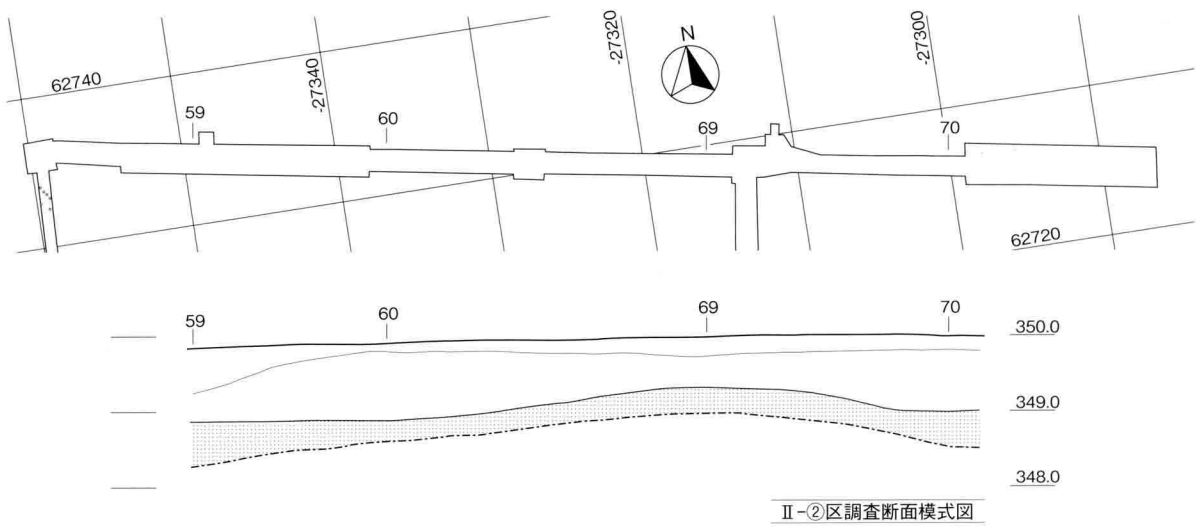
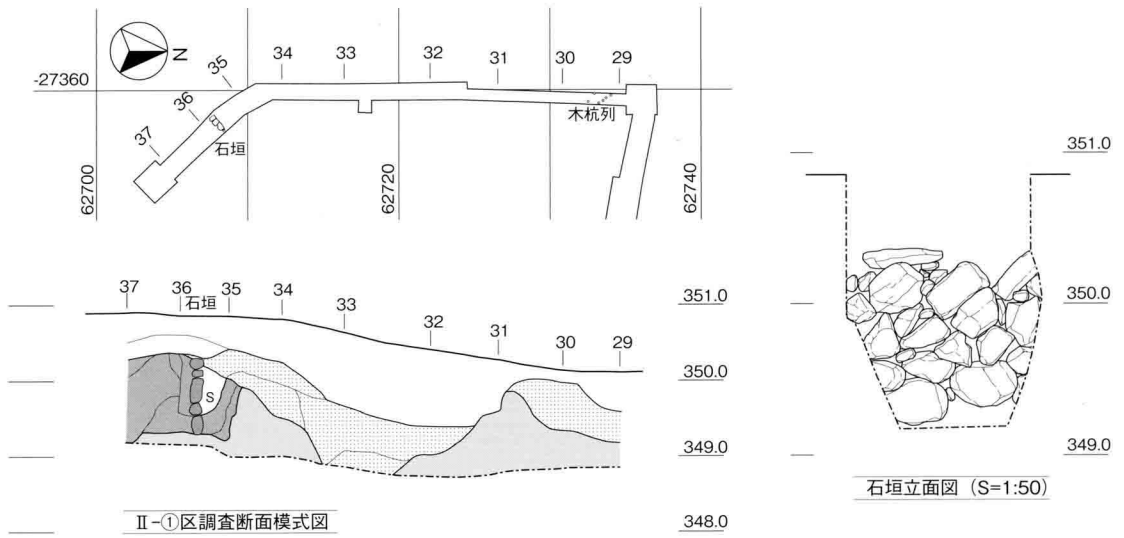


図5 調査区全体図

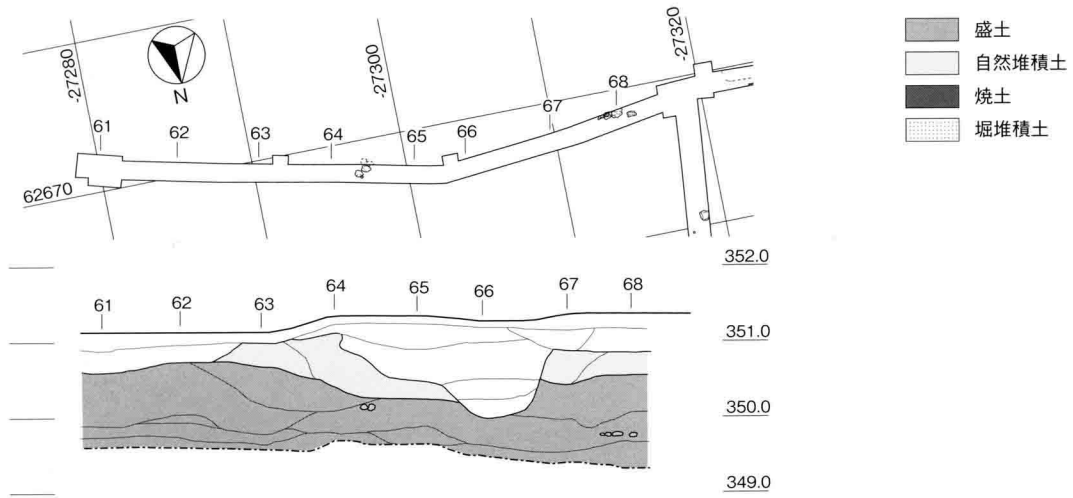
図 6 I区遺構調査図



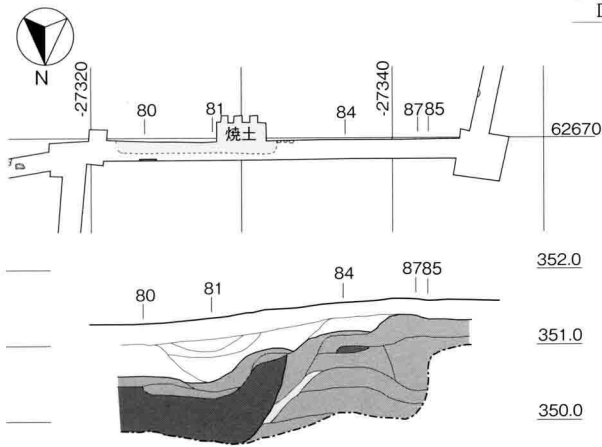


S=1:500 (平面・断面横), 1:100 (断面縦)

図7 II区遺構調査図



Ⅲ-①区（東部）調査断面模式図



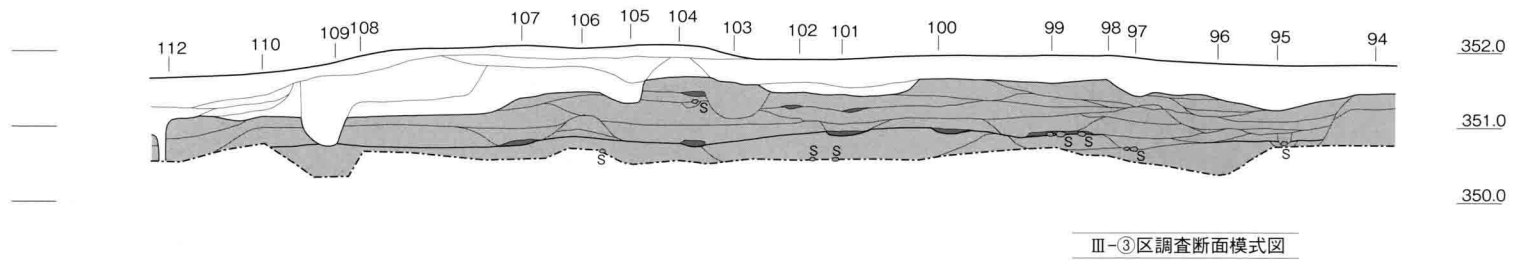
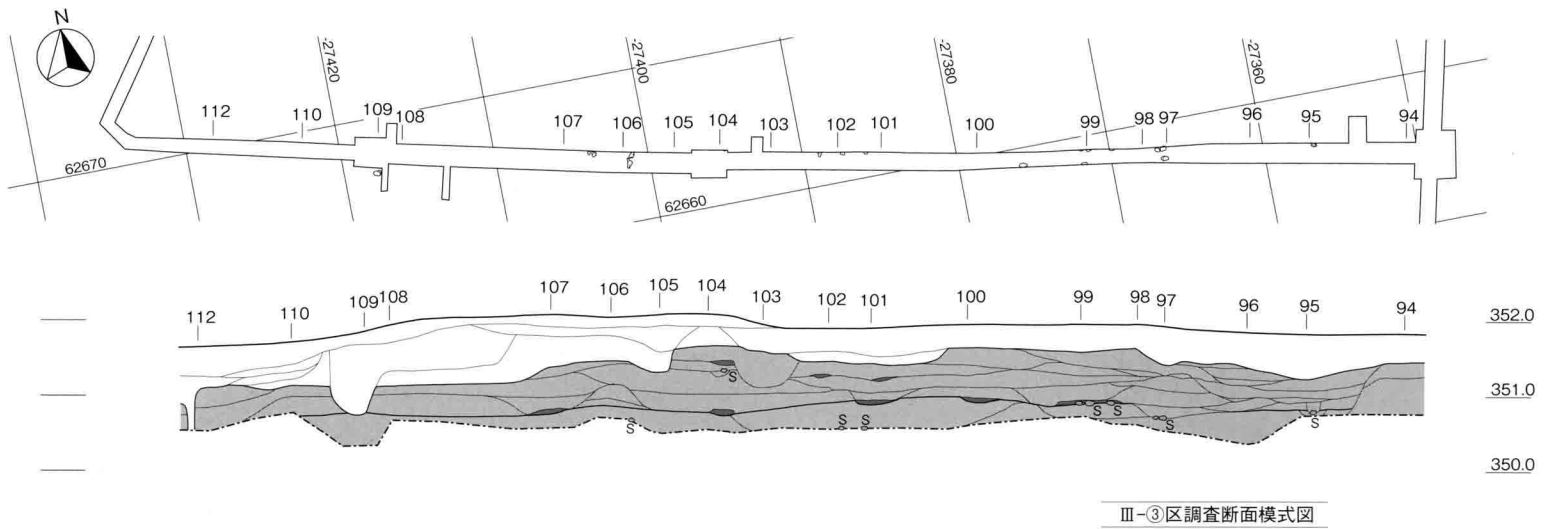
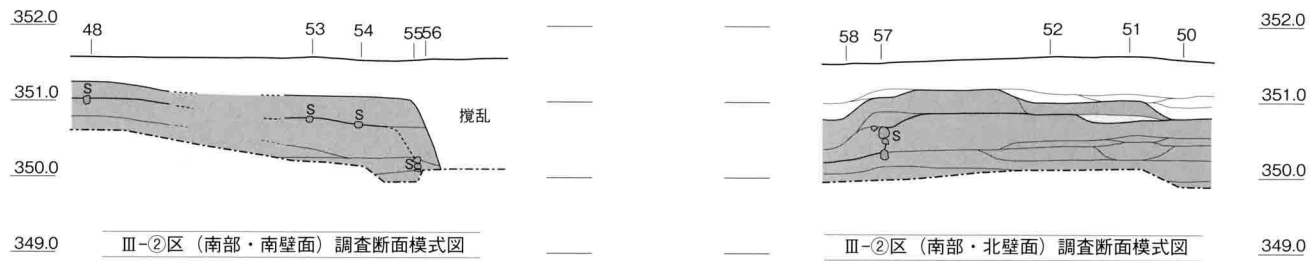
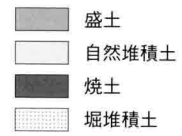
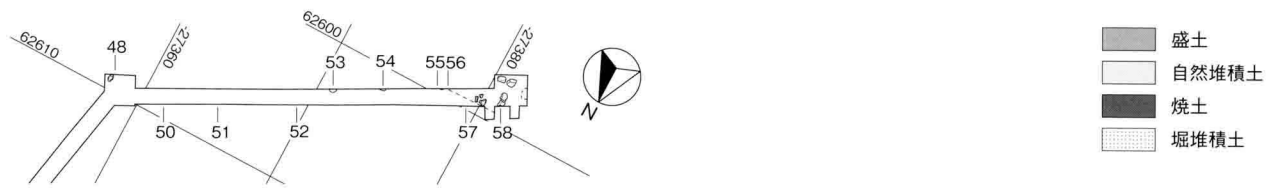
Ⅲ-①区（西部）調査断面模式図



Ⅲ-②区（北部）調査断面模式図

S=1:500 (平面・断面横), 1:100 (断面縦)

図8 Ⅲ区遺構調査図(1)

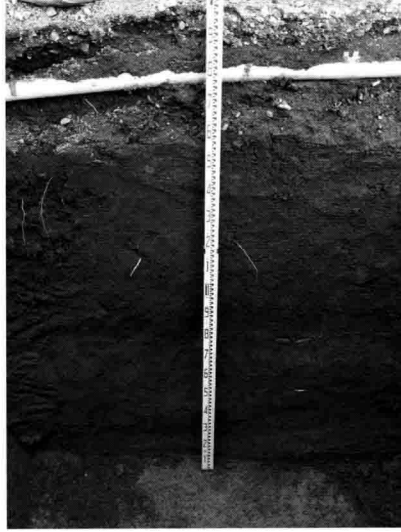


S=1:500 (平面・断面横), 1:100 (断面縦)

图9 III区遺構調査図(2)



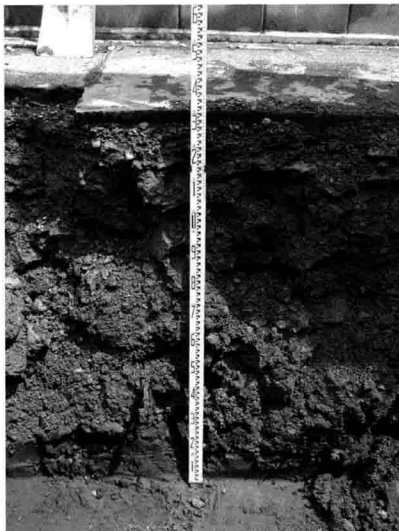
SP3 (I区)



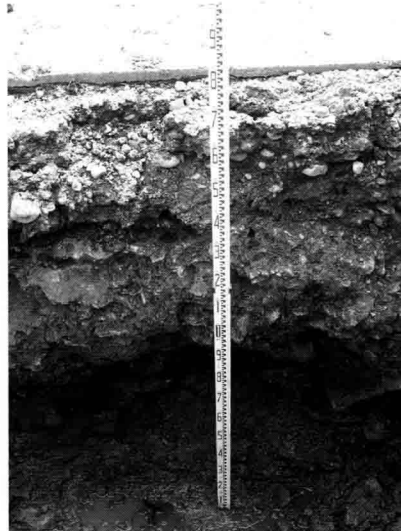
SP15 (I区)



SP34 (II-①区)



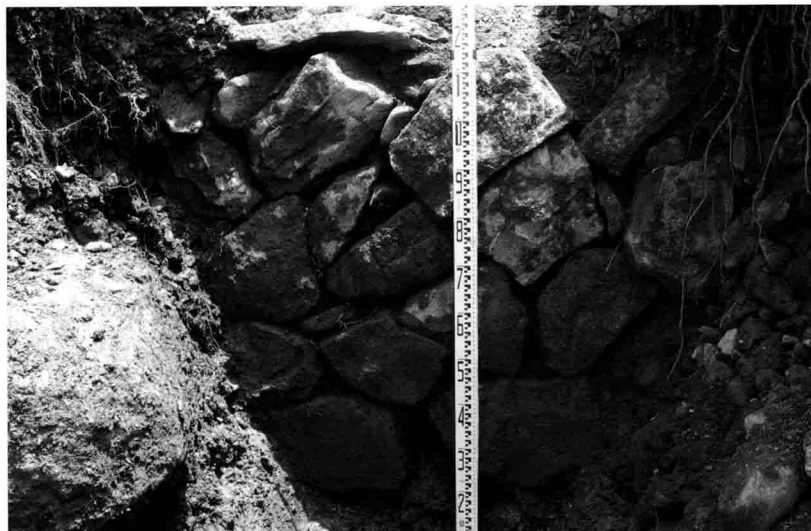
SP60 (II-②区)



SP74 (II-③区)



木杭列 (II-①区)



石垣 (II-①区)



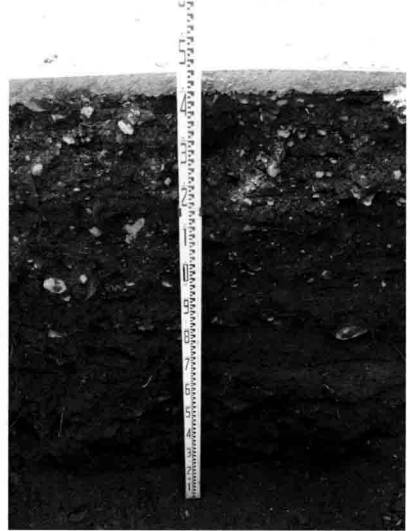
石積 (II-③区)



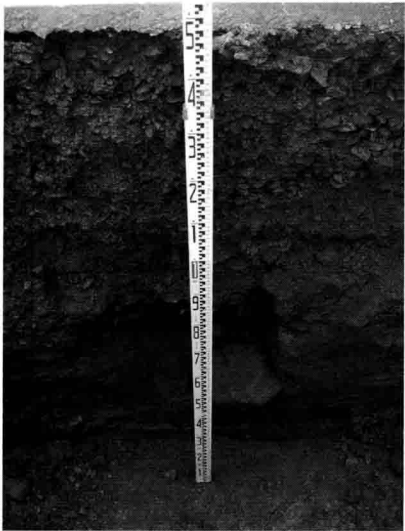
SP62 (III-①区)



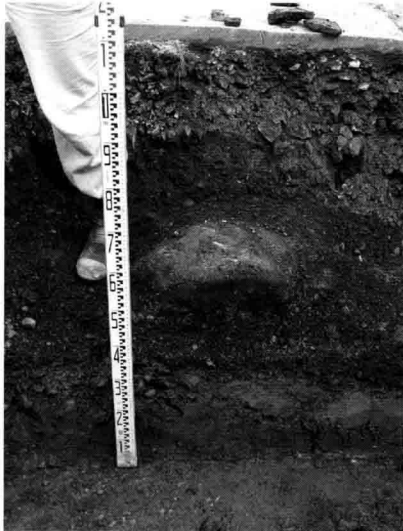
SP67 (III-①区)



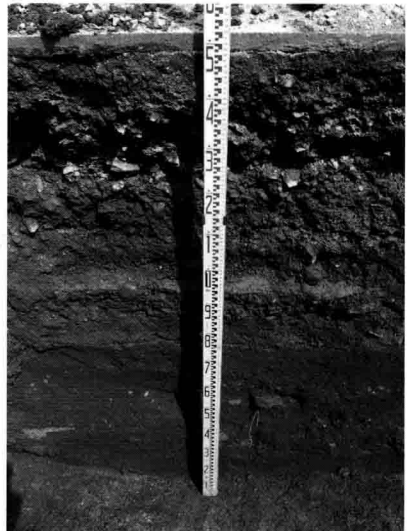
SP80 (III-①区)



SP43 (III-②区)



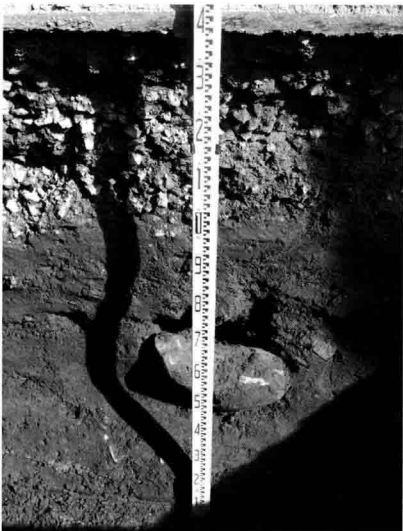
SP48 (III-②区)



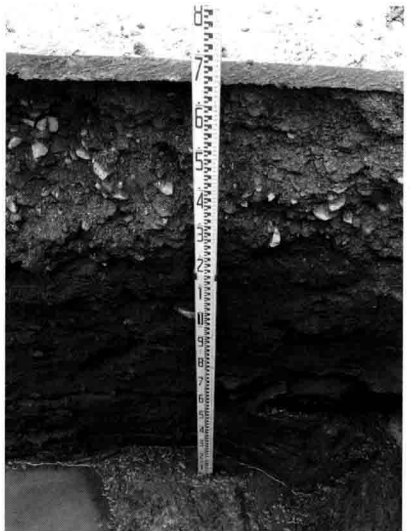
SP51 (III-②区)



SP53 (III-②区)



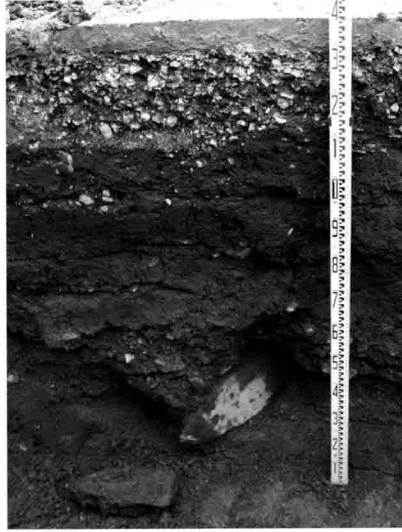
SP54 (III-②区)



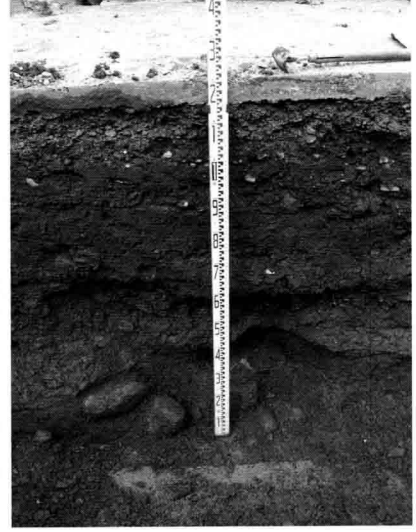
SP55 (III-②区)



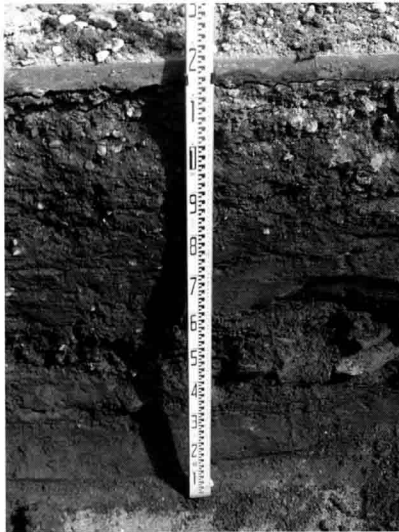
SP95 (Ⅲ-③区)



SP97 (Ⅲ-③区)



SP99 (Ⅲ-③区)



SP101 (Ⅲ-③区)



SP107 (Ⅲ-③区)



SP112 (Ⅲ-③区)



礎石 (Ⅲ-②区 SP53)



礎石 (Ⅲ-③区 SP97)



礎石 (Ⅲ-③区 SP102)

第3節 出土遺物の概要

(1) 陶磁器・土器

全体概要 全体的に小破片が多数を占めており、完形もしくはそれに近い個体の出土は見られない。破片も、Ⅱ-①区のみ集中して出土したが、多くは疎らに出土が確認されるのみであった。年代は18世紀末から19世紀にかけての肥前系磁器、瀬戸美濃系陶磁器が主体となるが、19世紀前半に生産を開始した松代焼製品も散見される。器種は磁器の碗・皿・鉢、陶器の碗・皿・鉢類、炆器播鉢などの日常雑器が中心である。以下、地区毎に出土陶磁器の詳細を述べる。

Ⅰ区出土の陶磁器 出土点数が、他の調査区と比べて圧倒的に少ない。また、出土遺物の多数は既設管理土中であり、直接遺構に伴う資料ではない。特徴的なものとしては、弥生時代中期の甕の破片が1点出土しており、旧千曲川上流の自然堤防上に存在する弥生期の集落遺跡の遺物が混入したものと想定される。

Ⅱ区出土の陶磁器 Ⅱ-①区は全調査区の中で、最も出土点数が多い一方、Ⅱ-②区では出土遺物は確認されていない。またⅡ-③区では調査区南端の石積み周辺から明治期以降のものを主体に出土している。Ⅱ-①区の出土陶磁器は肥前系磁器や瀬戸美濃系陶磁器が主体をなし、概ね18世紀末から19世紀以降に比定される。1・2・5は瀬戸美濃系の碗、3・6～10は肥前系の碗・蓋・皿である。11は瀬戸美濃系の馬の目皿であり、高台内には墨書の一部が確認できる。12の陶器播鉢は生産地不明だが、高台内まで鉄釉を施す。13・14の火鉢、15の播鉢は松代焼の製品である。また外堀石垣の盛土中より出土した肥前系磁器碗は、コンニャク印判による松文を施しており、17世紀末から18世紀末に比定される。16・17は肥前系の播鉢であり、生産年代は18世紀中頃から19世紀後半に比定される。18は在地系の焙烙だが、小破片のため内耳の有無は不明である。19は軒棧瓦であり、軒丸部に結び雁金文を、軒平部に山形文を施す。この他にも多数の瓦破片が出土している。Ⅱ-①区は外堀の接岸部にあたると思われるため、花の丸曲輪で使用された陶磁器・瓦が堀に廃棄された状況が推察されるが、被熱した陶磁器等、花の丸御殿の焼失に関わる資料は確認されていない。一方、Ⅱ-③区では人工コバルトを用いた19世紀末以降所産の磁器が主体であり、20は銅版転写である。

Ⅲ区出土の陶磁器 Ⅲ-①区東側は既設管によって攪乱を受けているが、西側からは18世紀末から19世紀にかけての肥前系磁器、瀬戸美濃系陶磁器を主体に京・信楽系の碗(25)が出土している。Ⅲ-①区西側の焼土中からは六文銭軒丸瓦(27)が出土しているが、陶磁器の出土はわずかである。Ⅲ-②区では北半部では陶磁器の出土がわずかにみられるものの、南半部ではほとんど確認することができない。概ね19世紀前後の肥前系磁器、瀬戸美濃系陶磁器を主体とするが、いずれも小破片での出土にとどまっている。Ⅲ-③区は花の丸御殿中央部に位置するが、遺物の出土量は少なく、19世紀前後から明治期にかけての肥前系磁器、瀬戸美濃系陶磁器を主体としている。29・30は瀬戸美濃系の磁器碗であり、19世紀初頭以降に比定される。出土遺物は、検出された2層の焼土層の中間層および焼土層上層で出土していることから、これらの堆積土層は嘉永6年(1853)の火災および明治6年(1873)の火災後の整地層と判断される。ただし下層焼土層より下位では、出土遺物が確認されておらず、堆積土層の正確な時期を想定することは困難な状況である。また、Ⅲ-③区西側では、古墳時代後期の土師器甕および平安時代の坏が出土しており、花の丸造営以前において自然堤防上に集落が存在した可能性が想定される。

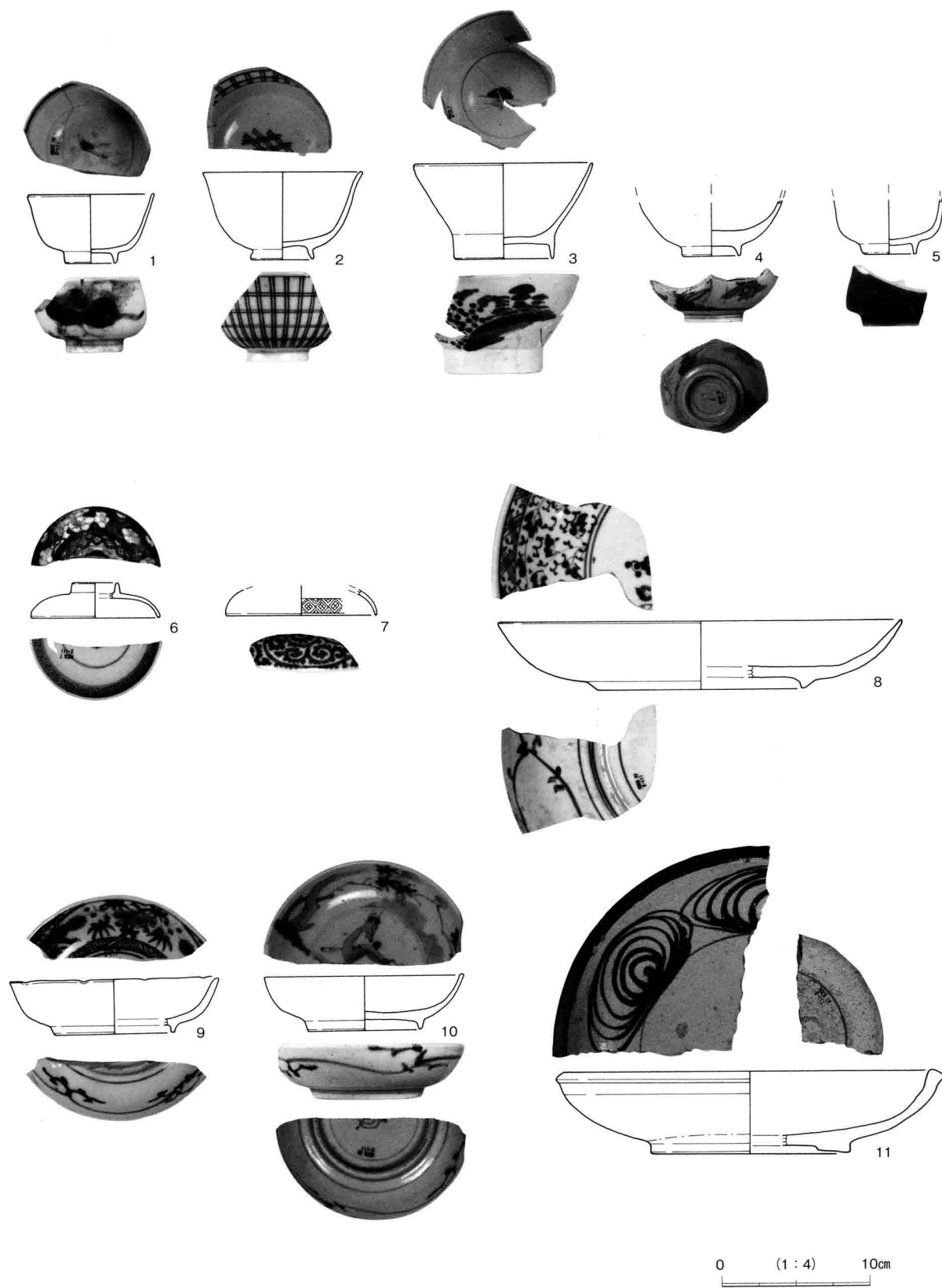


图10 II区出土遺物 (II-①区)

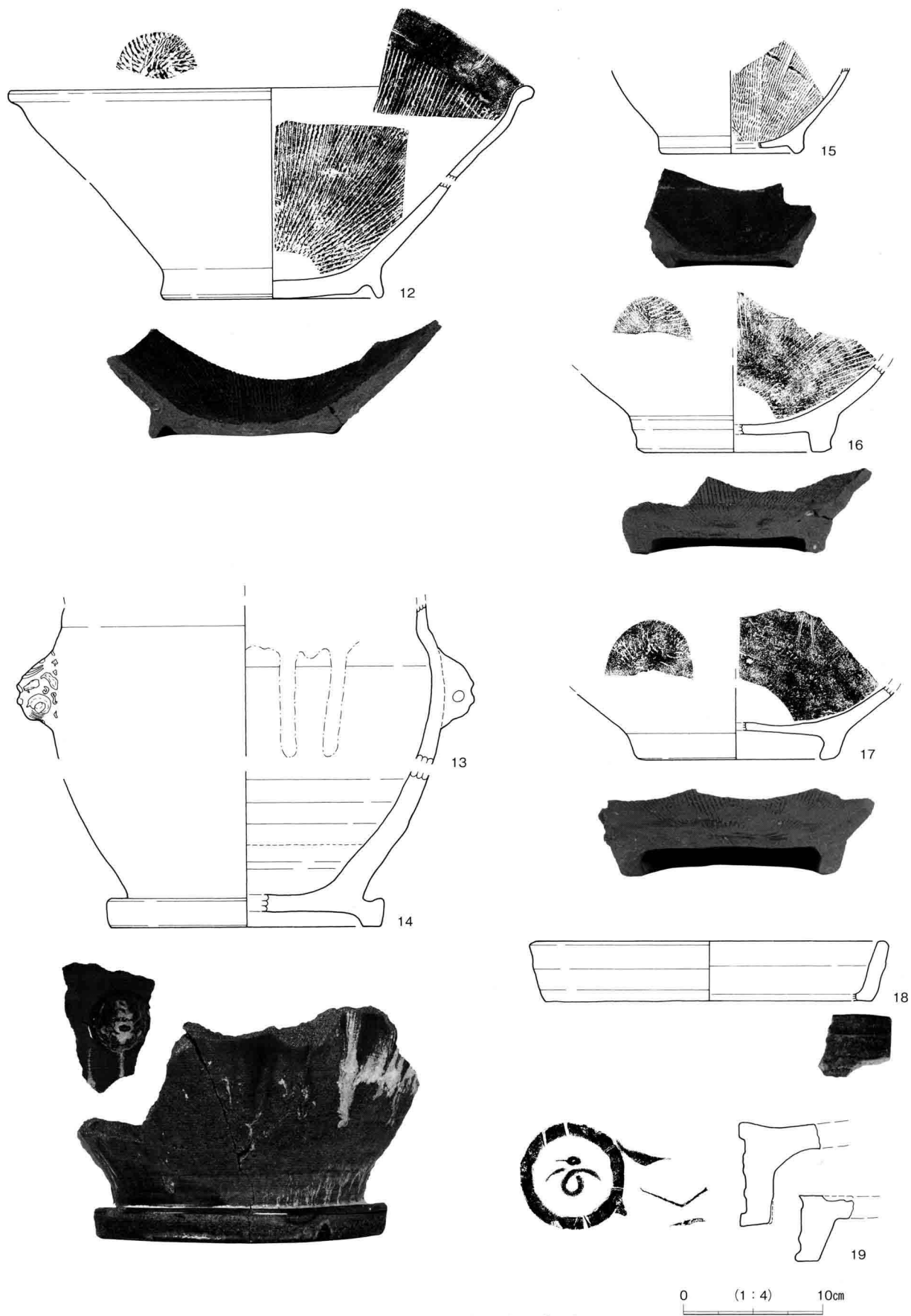
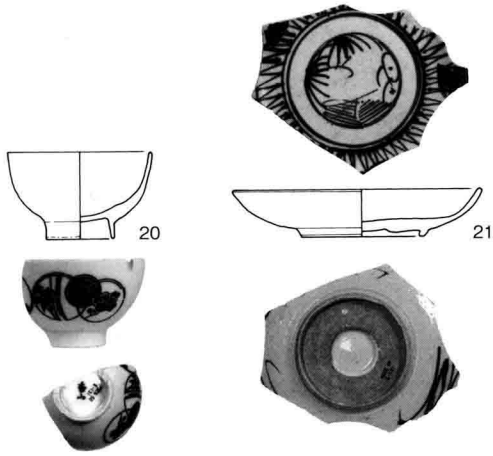
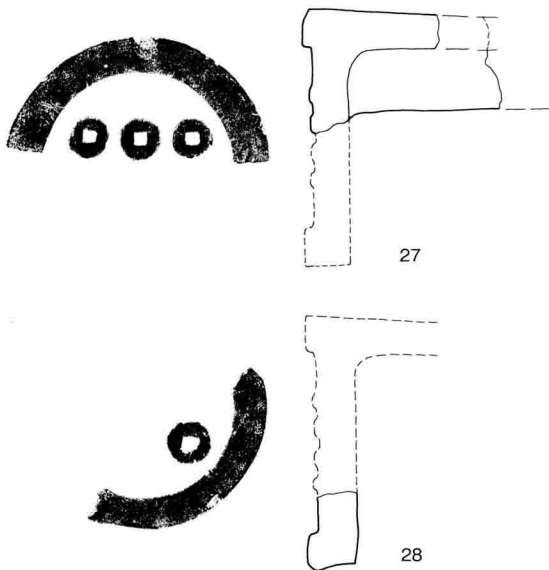
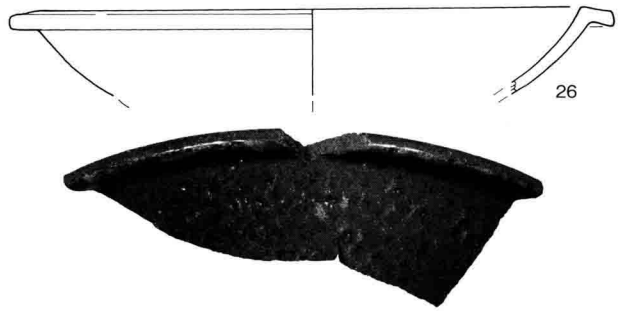
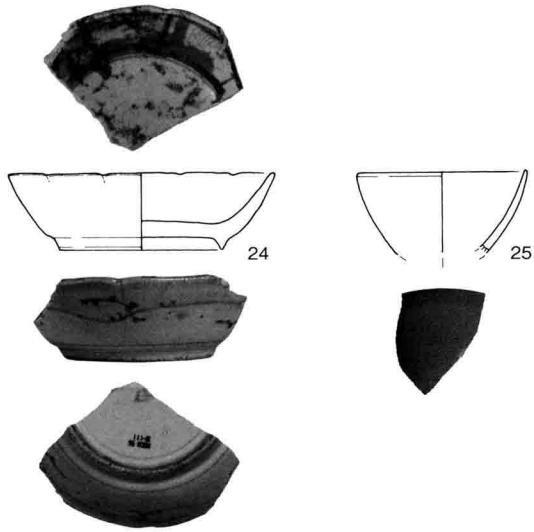
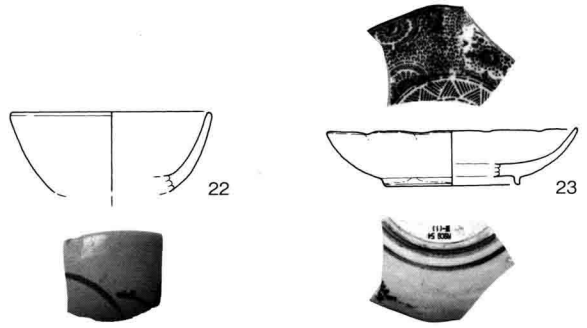


图11 II区出土遗物 (II-①区)

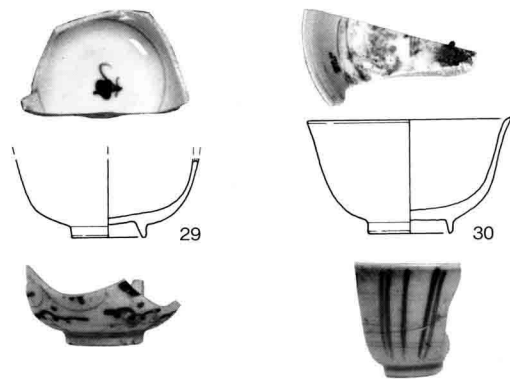
II-③区



III-①区



III-③区



0 (1:4) 10cm

图12 II·III区出土遺物 (II-③·III-①·III-③区)

遺物観察表

整理番号	出土地点			種別	器種分類	形状	胎土色・特徴	成形技法	絵付・顔料・釉薬等	法量 (cm)				残存率 (全体)	文様・その他				所見							
	区	遺物番号	層位							口径	底径	器高	重量 (g)		外面	内面	見込	高台内	特記事項	推定産地	推定年代					
1	II-①	19	不明	磁器	小碗	端反形	白	ロク口	呉須・透明釉	8.4	3.4	4.6	50	60%	大根とねずみ	圏線	文様あり	—	—	—	—	—	瀬戸美濃系	1808~1860		
2	II-①	34	不明	磁器	小碗	端反形	白	ロク口	呉須・透明釉	10.8	4.4	5.9	51	40%	格子文	口縁付近格子文	格子文	—	—	—	—	—	瀬戸美濃系	1808~1860		
3	II-①	6	堀堆積	磁器	中碗	広東形	白	ロク口	呉須・透明釉	12.0	6.5	6.4	99	70%	山水文	二本線	風景	—	—	—	—	—	肥前系	1780~1860		
4	II-①	26	石垣直下	磁器	中碗	丸形	白灰	ロク口	呉須・透明釉		3.8	(3.7)	102	50%	草花文・松(2つ)・印判?	—	—	—	圏線内附れ大明年製	—	—	—	くらわんか手	肥前系	1690~1780	
5	II-①	5	堀堆積	磁器	小碗	腰張形	白	ロク口	瑠璃釉・透明釉		3.4	(3.7)	32	40%	瑠璃釉	透明釉	—	—	—	—	—	—	口縁欠損	瀬戸美濃系	1808~1860	
6	II-①	7	堀堆積	磁器	蓋	腰張形	白	ロク口	呉須・透明釉	8.8	3.0	2.4	16	40%	水裂地に梅	雷文	文様あり	—	—	—	—	—	つまみ大部分欠損	肥前系	1740~1860	
7	II-①	30	堀堆積	磁器	蓋	腰張形	白	ロク口	呉須・透明釉	10.0		(1.7)	4	8%	蜻唐草	四方樺文	—	—	—	—	—	—	口縁部分のみ	肥前系	1740~1860	
8	II-①	33	堀堆積	磁器	大皿	丸形	白	ロク口	呉須・透明釉	27.2	13.8	4.6	101	10%	唐草文	花唐草文	文様あり	—	—	—	—	—	口縁付近・四方樺文	肥前系		
9	II-①	33	堀堆積	磁器	小皿	輪花形	白	ロク口型打ち	呉須・透明釉	14.2	8.0	3.6	44	20%	唐草文	松竹梅文	渦文	—	—	—	—	—	—	発色にぶい	肥前系	
10	II-①	36	不明	磁器	小皿	丸形	白	ロク口	呉須・透明釉	13.4	7.5	3.7	101	50%	唐草文	山水文?	龍?	—	—	—	—	—	—	口縁内高福	肥前系	
11	II-①	19	不明	陶器	大皿	丸形	灰黄	ロク口	鉄釉・灰釉	26.2	13.4	5.5	264	25%	口縁に鉄釉	馬の日文	重ね積目跡	墨書あり	—	—	—	—	—	—	瀬戸美濃系	1800~1860
12	II-①	7	堀堆積	陶器	播鉢	高台付	灰茶・まだらに暗茶・明黄混じる	ロク口	鉄釉	26.6	15.6	15.0	836	40%	施釉	放射線目直線重複	放射線目重複	—	—	—	—	—	—	—	—	—
13	II-①	5	堀堆積	陶器	火鉢	瓶掛形	茶褐・白粒子	ロク口	白泥・銅緑釉			(12.4)	201	5%	袖掛け	白泥に銅緑釉	—	—	—	—	—	—	14と同一個体	松代系	1810~	
14	II-①	5	堀堆積	陶器	火鉢	瓶掛形	茶褐・白粒子	ロク口	白泥・灰緑釉		19.0	13.3	929	25%	袖掛け	白泥に銅緑釉	—	—	—	—	—	—	13と同一個体	松代系	1810~	
15	II-①	21	不明	炆器	播鉢	高台付	暗茶・白粒子	ロク口	鉄釉		9.8	(5.9)	111	20%	施釉	放射線目直線重複	放射線目重複	—	—	—	—	—	—	松代系	1810~	
16	II-①	7	堀堆積	炆器	播鉢	高台付	赤褐	ロク口	鉄釉		14.0	(6.1)	374	25%	施釉	放射線目直線重複	放射線目重複	—	—	—	—	—	—	摩滅著しい	肥前系	1750~1860
17	II-①	9	堀堆積	炆器	播鉢	高台付	赤褐	ロク口	鉄釉		14.0	(5.1)	440	20%	施釉	放射線目直線重複	放射線目重複	—	—	—	—	—	—	肥前系	1750~1860	
18	II-①	12	不明	土器	焙烙	平底	褐	ロク口	無施釉	24.6	(23.4)	4.3	34	6%	スズ付着	—	—	—	—	—	—	—	内耳有り?	在地系		
20	II-③	50	堀堆積	磁器	小碗	丸形	白	ロク口	コバルト・透明釉	7.8	3.6	4.6	43	45%	松竹梅	—	—	—	—	—	—	—	「香山」銅板転写	—	1889~	
21	II-③	49	堀堆積	磁器	小皿	丸形	白灰	ロク口	コバルト・透明釉	13.2	6.3	2.5	102	50%	唐草文	網目文・草花文	松竹梅環状文	蛇の目高台	—	—	—	—	—	文様形散化	瀬戸美濃系?	1860~
22	III-①	57	二次堆積	磁器	小碗	丸形	白灰	ロク口	呉須・透明釉	10.4		(4.2)	25	8%	草花文	—	—	—	—	—	—	—	口縁のみ	肥前系	1690~1780	
23	III-①	54	不明	磁器	小皿	輪花形	白灰	ロク口型打ち	コバルト・透明釉	13.4	7.2	2.9	33	10%	高台際二重圏線	草花文	三角文	無施釉	—	—	—	—	—	型紙摺	瀬戸美濃系?	1882~
24	III-①	56	不明	磁器	小皿	輪花形	白灰	ロク口	呉須・透明釉	14.2	8.6	4.0	97	25%	唐草文	区画に草花	五弁花? (2つ)・印判?	—	—	—	—	—	—	景付に砂付着・くらわんか手	肥前系	1690~1780
25	III-①	57	二次堆積	陶器	小碗	杉形	灰黄	ロク口	灰釉	9.0		(4.3)	10	15%	袖掛け	袖掛け	—	—	—	—	—	—	大部分欠損	京・信楽系	1740~1800	
26	III-①	55	二次堆積	陶器	大皿	鐔縁形	灰	ロク口	緑釉	32.0		(4.5)	154	10%	袖掛け	袖掛け	—	—	—	—	—	—	口縁のみ	—		
29	III-③	63	二次堆積	磁器	小碗	腰張形	白	ロク口	呉須・透明釉		8.0	(4.2)	61	40%	蛇行唐草	—	草花文	—	—	—	—	—	—	口縁部欠損	瀬戸美濃系	1808~
30	III-③	63	二次堆積	磁器	小碗	端反形	白	ロク口	呉須・透明釉	10.6	4.4	6.0	39	30%	格子文	二重圏線	記銘あり	—	—	—	—	—	—	瀬戸美濃系	1808~	

整理番号	出土地点			種別	種類	法量 (cm)				文様・その他	所見
	区	遺物番号	層位			縦幅	横幅	厚さ	重量 (g)		
19	II-①	13	不明	瓦	軒棧瓦	7.3	16.5	2.3	417	丸部：結び雁金 平部：山形文	
27	III-①	53	不明	瓦	軒丸瓦			1.7-2.0	435	推定径：13.5cm 六文銭	
28	III-①	60	不明	瓦	軒丸瓦			2.0-2.6	163	推定径：13.5cm 六文銭	

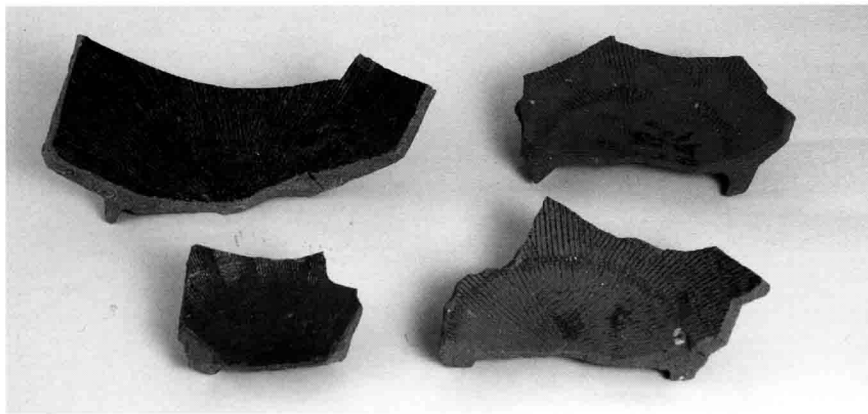
遺物観察表 (実測対象外)

区	遺物番号	出土地点		種別	器種分類	形状	胎土色特徴	成形技法	絵付顔料・釉薬等	重量	所見		
		層位									特記事項	推定産地	推定年代
I	1	カクラン	磁器	中碗	平形?	白	ロクロ	透明釉	13	銅版転写、近代製品		昭和～	
I	2	盛土?	他						18	弥生土器 壺			
I	3	カクラン	瓦	平瓦					94				
I	4	カクラン	磁器	皿	不明	白	ロクロ	呉須・透明釉	17	高台部分のみ	瀬戸・美濃	1808～	
II-①	5	堀堆積	磁器	小碗	半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉	10	外面：蛇行唐草文	瀬戸・美濃	1808～	
II-①	5	堀堆積	陶器	火鉢	不明	暗茶・白粒子	ロクロ	白泥・灰釉	1,148	外面：わら灰釉 内面・高台内：白泥	松代系	1810～	
II-①	5	堀堆積	陶器	中碗	丸形	乳白	ロクロ	灰釉					
II-①	5	堀堆積	瓦	平瓦・丸瓦					9,170				
II-①	6	堀堆積	磁器	中皿	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	81	外面：文様あり 内面：竹文	肥前系		
II-①	6	堀堆積	磁器	中碗	半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉		外面：草花文 見込：五弁花? (2024印刷?)	肥前系	1750～1800	
II-①	6	堀堆積	磁器	小碗	筒丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉		外面：稲束文	肥前系		
II-①	6	堀堆積	磁器	中皿	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉		高台部分のみ	肥前系		
II-①	6	堀堆積	陶器	小碗	丸形	灰	ロクロ	呉須・透明釉	422	外面：草文?			
II-①	6	堀堆積	陶器	捏鉢	口縁玉縁形	暗茶・白粒子	ロクロ	白泥・緑釉			松代系	1816～	
II-①	6	堀堆積	陶器	捏鉢	把手なし形?	黄白	ロクロ	灰釉・赤色釉		口縁：捺り返し形			
II-①	6	堀堆積	陶器	中皿	鈔縁形	乳白	ロクロ	呉須・灰釉		内面：文様あり (呉須絵)	瀬戸・美濃	1820～	
II-①	6	堀堆積	陶器	土瓶破片など						三彩土瓶 他破片2点		1820～	
II-①	7	堀堆積	磁器	中皿	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	40	内面：蜻蛉草文 外面：唐草文	肥前系	1780～	
II-①	7	堀堆積	磁器	蓋物	不明	白	ロクロ	呉須・透明釉		外面：雷文・梅文 口縁内側無施釉	瀬戸・美濃	1808～	
II-①	7	堀堆積	陶器	土瓶	算盤玉形	乳白	ロクロ	灰釉	340	大部分欠損、胴部破片のみ	京・信楽系		
II-①	7	堀堆積	陶器	小碗	杉形	乳白	ロクロ	透明釉		高台部分のみ	京・信楽系	1740～	
II-①	7	堀堆積	陶器	甕	不明	黄白	ロクロ	透明釉		目跡4ヶ所 無高台			
II-①	8	堀堆積	陶器	播鉢	不明	灰茶・鉄色暗茶・明黄混染	ロクロ	鉄釉	138	整理 No.12と接合			
II-①	11	堀堆積	陶器	小碗	杉形	灰白	ロクロ	透明釉	43	高台部分のみ	京・信楽系		
II-①	11	堀堆積	陶器	鉢か甕	不明	茶褐	ロクロ	白泥・鉄釉					
II-①	12	不明	陶器	播鉢	口縁玉縁形	暗茶・白粒子	ロクロ	鉄釉	168		松代系		
II-①	13	不明	磁器	中碗	半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉	32	外面：文様あり	瀬戸・美濃	1808～	
II-①	13	不明	磁器	中碗	丸筒形?	白	ロクロ	呉須・透明釉		外面：草花文	瀬戸・美濃	1808～	
II-①	13	不明	陶器	中皿	鈔縁形	乳白	ロクロ	呉須・灰釉	185	内面：文様あり	瀬戸・美濃	1820～	
II-①	13	不明	陶器	小鉢	不明	乳白	ロクロ・貼付	白釉・鉄釉					
II-①	13	不明	陶器	甕	不明	黄白	ロクロ	透明釉		目跡1ヶ所 無高台			
II-①	14	堀堆積	瓦	平瓦					239				
II-①	15	堀堆積	磁器	中皿	不明	白	ロクロ	呉須・透明釉	17	外面・内面：文様あり	肥前系		
II-①	16	不明	磁器	鉢	不明	白	ロクロ	呉須・透明釉	22	外面：文様あり	肥前系		
II-①	16	不明	陶器	火鉢	瓶掛形	暗茶・白粒子	ロクロ	白泥・灰釉	559	把手部分のみ	松代系	1816～	
II-①	17	カクラン	他	タイル						近代製品			
II-①	18	不明	土器	不明		赤褐		無施釉	20				
II-①	18	不明	磁器	不明		赤褐		鉄釉	51		瀬戸・美濃	1808～	
II-①	19	不明	磁器	小瓶	不明	白	ロクロ	呉須・透明釉	79	外面：文様あり	瀬戸・美濃	1808～	
II-①	19	不明	磁器	皿	不明	白	ロクロ?	呉須・透明釉		「化年製」の記録	肥前系		
II-①	19	不明	磁器	皿	不明	白	ロクロ	呉須・透明釉		内面：草花文	肥前系		
II-①	19	不明	磁器	小碗	端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉		外面：蛇行唐草文	瀬戸・美濃		
II-①	19	不明	磁器	碗破片等		白	ロクロ	呉須・透明釉		破片2点	瀬戸・美濃		
II-①	19	不明	陶器	中碗	丸形	灰	ロクロ	呉須・透明釉	536	外面：文様あり 内面：一重團縁	肥前系		
II-①	19	不明	陶器	火鉢	瓶掛形	茶褐・白粒子	ロクロ	白泥・わら灰釉・緑釉		外面：軸掛付 内面：白泥	松代系	1810～	
II-①	19	不明	陶器	蓋	土瓶蓋	灰	ロクロ	白泥・鉄釉・灰釉		つまみ部分欠損			
II-①	19	不明	陶器	植木鉢	桶形切込腰輪高台	乳白	ロクロ	緑釉		高台部分のみ	瀬戸・美濃	1800～	
II-①	19	不明	陶器	中瓶	瓢形	灰黄	ロクロ	鉄釉			瀬戸・美濃		
II-①	20	盛土	磁器	仏飯器	不明	灰白	ロクロ	呉須・透明釉	18	外面：團降り文	肥前系	1720～1800	
II-①	20	盛土	磁器	碗	不明	灰白	ロクロ	呉須・透明釉		外面・内面：文様あり	肥前系		
II-①	21	不明	磁器	中皿	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	125	外面：唐草文 内面：文様あり	肥前系		
II-①	21	不明	磁器	皿	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉		見込：環状に松竹梅 蛇の目高台	瀬戸・美濃	1820～	
II-①	21	不明	瓦	平瓦					77				
II-①	21	不明	陶器	不明		茶褐	ロクロ	鉄釉	26				
II-①	22	不明	瓦	平瓦					133				
II-①	23	不明	磁器	皿	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	13	蛇の目高台 外面：唐草文 内面：見込：変形書字文	肥前系	1750～	
II-①	23	不明	瓦	平瓦					58				
II-①	24	不明	磁器	碗蓋	不明	白	ロクロ	呉須・透明釉	66	外面：草花文 見込：花文 つまみ内：記号あり	肥前系	1780～	
II-①	24	不明	磁器	不明		白	ロクロ	透明釉			瀬戸・美濃	1860～	
II-①	25	不明	磁器	大碗	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	38	外面：草花文 見込：四弁花	肥前系	1820～	
II-①	27	不明	磁器	小碗	腰張形	白	ロクロ	呉須・透明釉	111	外面：蛇行唐草文 見込：文様あり	瀬戸・美濃	1808～	
II-①	27	不明	磁器	小皿	不明	白	ロクロ	呉須・透明釉		内面：楼閣山水文	肥前系		
II-①	28	不明	磁器	大碗	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	40	外面：草花文 見込：四弁花	肥前系	1820～	
II-①	28	不明	磁器	皿	輪花形	白	ロクロ	呉須・透明釉		外面：唐草文 内面：文様あり	瀬戸・美濃	1808～	

区	出土地点		種別	器種分類	形状	胎土色特徴	成形技法	絵付顔料・釉薬等	重量	所見		
	遺物番号	層位								特記事項	推定産地	推定年代
II-①	28	不明	陶器	壺?	不明	灰黄	ロクロ	灰釉	91	高台部分のみ		
II-①	28	不明	陶器	不明		乳白	ロクロ	鉄釉・緑釉		大部分欠損		
II-①	29	不明	磁器	不明(碗?)		白	ロクロ?	呉須・透明釉	4	大部分欠損	肥前系?	
II-①	30	堀堆積	陶器	中皿	鈔縁形	乳白	ロクロ	灰釉	34	口縁部分のみ	瀬戸・美濃	1820~
II-①	33	堀堆積	磁器	碗	不明	白	ロクロ	呉須・透明釉	91	外面:文様あり(團縁?)	肥前系	
II-①	34	不明	磁器	中碗	広東形	白	ロクロ	呉須・透明釉	167	外面・内面:文様あり	瀬戸・美濃	1808~
II-①	34	不明	磁器	中碗	半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉		外面・内面:文様あり	瀬戸・美濃	1808~
II-①	34	不明	磁器	中碗	半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉		外面:渦巻文 見込:文様あり	肥前系	
II-①	34	不明	磁器	皿	不明	白	ロクロ	呉須・透明釉		外面・高台内:文様あり 見込:四弁花	肥前系	
II-①	34	不明	磁器	小皿	輪花形	白	ロクロ	呉須・透明釉		外面・内面:文様あり	肥前系	
II-①	34	不明	磁器	小碗	筒丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉		外面:文様あり	肥前系	
II-①	34	不明	磁器	中碗	半筒形	白	ロクロ	青磁釉・呉須・透明釉		外面:青磁 内面:四方禪文(にじみ 敷しい)	肥前系	
II-①	34	不明	磁器	酒杯	端反形	白	ロクロ	透明釉		「松代中町 海口物□ 食塩□□」		1860~
II-①	34	不明	磁器	碗?	不明	白	ロクロ	透明釉		小破片		
II-①	34	不明	陶器	中瓶	べこかん形	灰	叩・胴部押圧	鉄釉	120	胴部沈線	瀬戸・美濃	1780~
II-①	34	不明	陶器	土瓶	算盤玉形	灰	ロクロ	青緑釉			大塚相馬系?	1800~
II-①	34	不明	陶器	中瓶	高田徳利形	乳白	ロクロ	灰釉		胴部沈線	瀬戸・美濃	1750~ 1860
II-①	34	不明	陶器	碗	杉形	灰	ロクロ	透明釉		高台部分のみ	京・信楽系	1740~
II-①	34	不明	陶器	碗	不明	灰	ロクロ	灰釉		口縁のみ		
II-①	34	不明	磁器	不明		茶褐	ロクロ	白泥・灰釉	12			
II-①	36	不明	磁器	皿	不明	白	ロクロ	呉須・透明釉	86	見込・高台内:文様あり	瀬戸・美濃	1808~
II-①	36	不明	磁器	小碗	半球形	白	ロクロ	呉須・透明釉		外面:文様あり	肥前系	
II-①	36	不明	磁器	小碗	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉		外面:丸文	瀬戸・美濃	1808~
II-①	36	不明	磁器	碗	不明	白	ロクロ	呉須・透明釉		外面:草花文	瀬戸・美濃	1808~
II-①	36	不明	磁器	小皿	方形?	白	叩型打ち	透明釉		内面・見込:文様あり	瀬戸・美濃	1808~
II-①	36	不明	磁器	碗	端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉		外面:文様あり	肥前系	
II-①	36	不明	磁器	小碗	不明	白	ロクロ	呉須・透明釉		口縁部破片2点	肥前系	
II-①	36	不明	陶器	鉢	口縁玉縁形	茶褐色白粒子	ロクロ	灰釉・緑釉	280	口縁部分のみ	松代系	1810~
II-①	36	不明	陶器	鉢	口縁玉縁形	暗灰白粒子	ロクロ	緑釉		口縁部分のみ	松代系	1810~
II-①	36	不明	陶器	碗	口縁破片		ロクロ			2点		
II-①	36	不明	陶器	中碗	丸形	灰白	ロクロ	灰釉		高台部分のみ	瀬戸・美濃	
II-①	36	不明	陶器	中碗	腰張形	灰白	ロクロ	灰釉		口縁部分のみ	瀬戸・美濃	
II-①	36	不明	陶器	中碗	不明	灰白	ロクロ	灰釉		高台部分のみ	瀬戸・美濃	
II-①	36	不明	陶器	中碗	平形	灰	ロクロ	灰釉		高台部分のみ	瀬戸・美濃	
II-③	48	カクラン	他	ガラス瓶等						近代製品		
II-③	50	堀堆積	磁器	小碗	筒形	白	ロクロ	透明釉・青磁釉	75	外面:青磁・土絵(漢詩) 内面:透明釉		1860~
II-③	50	堀堆積	磁器	酒杯	不明	白	ロクロ	透明釉		高台部分のみ		1860~
II-③	51	不明	磁器	小皿	輪花形	白	叩型打ち	呉須・透明釉・鉄釉	51	口紅 見込:楼閣山水文	肥前系	1740~
II-③	51	不明	磁器	中碗	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉		外面:草花文 内面:文様あり	瀬戸・美濃	1808~
II-③	51	不明	磁器	圓徳利	不明	白	ロクロ	コトト、透明釉			瀬戸・美濃	1860~
II-③	52	盛土	陶器	鉢	不明	赤褐色白粒子	ロクロ	白泥	60	口縁から内側に白泥	松代系	1810~
III-①	44	カクラン	磁器	播鉢	不明	黄褐		鉄釉	48	底部破片のみ		
III-①	54	不明	磁器	鉢	六角形?	白	叩型打ち	呉須・透明釉	17	内面・外面:文様あり	瀬戸・美濃	1808~
III-①	55	二次堆積	磁器	小碗	不明	白	ロクロ	呉須・透明釉	43	小破片 外面:文様あり	瀬戸・美濃	1808~
III-①	55	二次堆積	磁器	碗	不明	白	ロクロ	呉須・透明釉		小破片 外面:草花文	瀬戸・美濃	1808~
III-①	55	二次堆積	磁器	碗	端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉		口縁部のみ 外面・内面:文様あり	瀬戸・美濃	1808~
III-①	55	二次堆積	磁器	碗	端反形	白	ロクロ	呉須・透明釉		外面・内面・見込:文様あり	瀬戸・美濃	1808~
III-②	39	盛土	他						9	平安 土師器杯		
III-②	40	カクラン	土器	不明					13	焙烙?		
III-②	41	不明	磁器	小碗	不明	白	ロクロ?	呉須・透明釉	6	被熱 高台部分のみ残存	瀬戸・美濃	1808~
III-②	42	不明	瓦	平瓦					302	被熱		
III-②	58	二次堆積	磁器	大瓶	不明	白	ロクロ	透明釉	70	高台部分のみ	肥前系	
III-②	59	二次堆積	陶器	瓶	不明	灰	ロクロ	鉄釉	16		瀬戸・美濃	
III-②	61	二次堆積	磁器	小碗	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	7	外面:稲束文	瀬戸・美濃	1808~
III-②	61	二次堆積	陶器	碗	不明	乳白	ロクロ	灰釉	41	小破片		
III-②	61	二次堆積	陶器	不明		暗灰	ロクロ	灰釉		小破片	瀬戸・美濃	1750~
III-②	62	二次堆積	磁器	小碗	丸形	白	ロクロ	呉須・透明釉	22	外面:文様あり	肥前系	
III-③	65	二次堆積?	陶器	碗	不明	灰	ロクロ	灰釉	107	小破片	瀬戸・美濃	
III-③	65	二次堆積?	陶器	碗	不明	白	ロクロ	鉄釉		口縁部分のみ	瀬戸・美濃	
III-③	65	二次堆積?	陶器	中鉢	浅丸形?	暗褐	ロクロ	白泥・鉄釉		三島手 象嵌	肥前系	1650~
III-③	67	二次堆積	陶器	甕か壺	不明	灰	ロクロ	鉄釉	14	小破片		
III-③	68	不明	磁器	小皿	丸形	白	ロクロ	叩、透明釉	23	型紙摺	瀬戸・美濃	1882~
III-③	69	カクラン	磁器	大皿	不明	白	ロクロ	呉須・透明釉	88	外面:文様あり	肥前系	
III-③	70	二次堆積	磁器	小皿	不明	灰白	ロクロ	呉須・透明釉	33	見込:楼閣山水文	肥前系	1740~ 1800
III-③	70	二次堆積	陶器	土瓶	不明	灰黄	ロクロ	灰釉	37	底部破片のみ	京・信楽系	
III-③	70	二次堆積	土器	不明		茶褐			18			
III-③	71	不明	磁器	小皿	不明	白	ロクロ	コトト、透明釉	10	銅版転写		1889~
III-③	71	不明	他						11	古墳 土師器甕		
III-③	73	自然堆積	他						48	古墳 土師器甕		
III-③	75	自然堆積	他						29	平安 土師器杯		
III-③	76	自然堆積	他						20	不明土師器 甕		



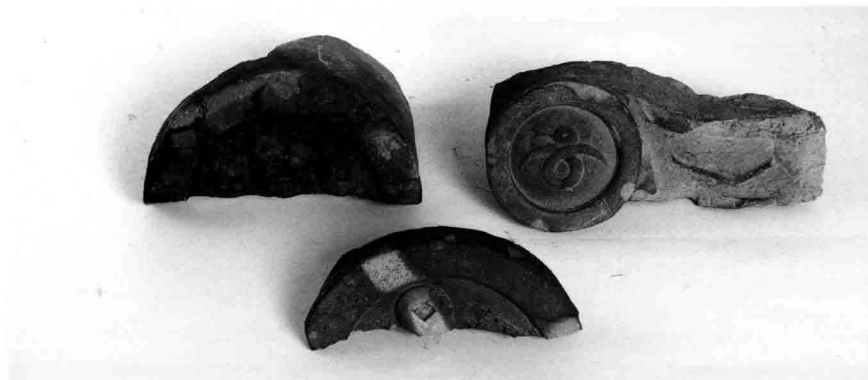
II区出土陶磁器



II区出土擂鉢



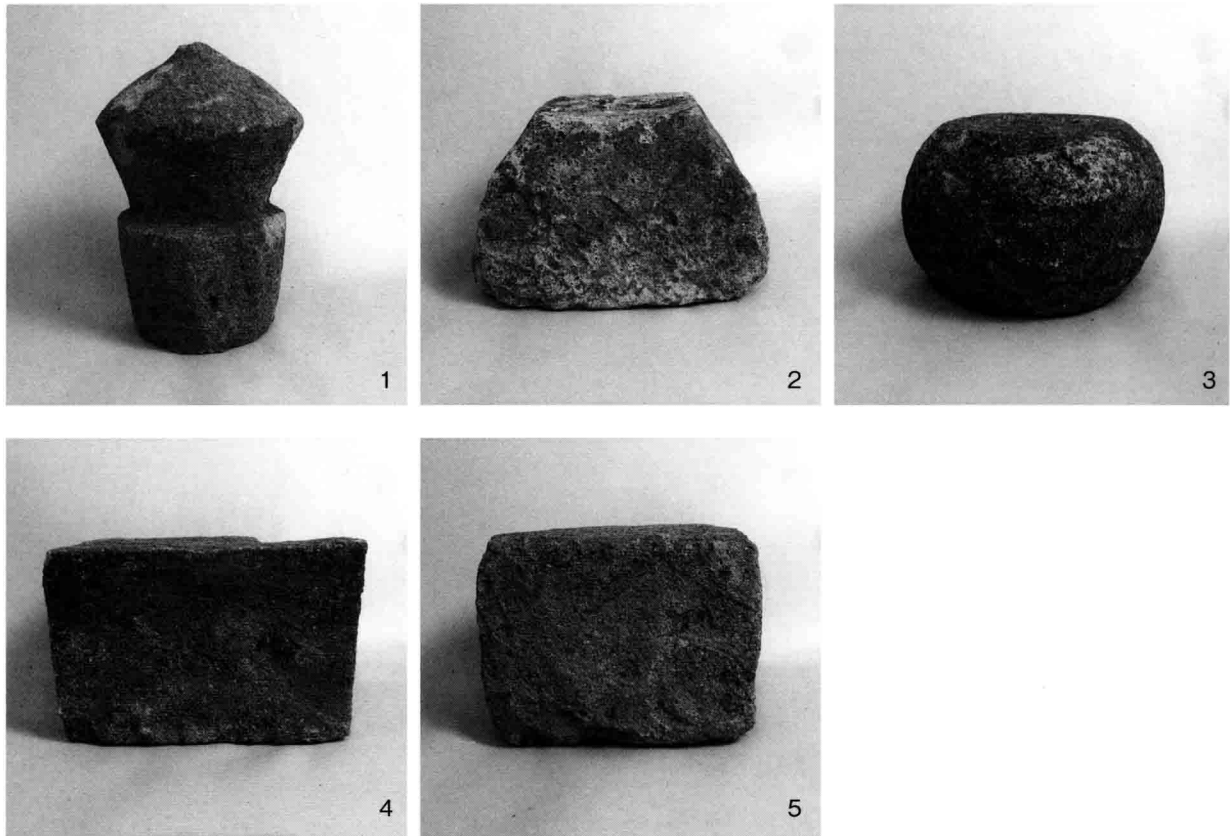
III区出土陶磁器



出土軒丸瓦

(2) 石造物

出土石造物の概要 調査では、5点の石造物が出土している。石造物は全て五輪塔であり、空風輪が1点、火輪が1点、水輪が1点、地輪が2点である。五輪塔は仏教の宇宙を構成する要素として空・風・火・水・地の五輪を表した石造物であり、中世の信仰対象物である。発掘調査では近世以降に廃棄あるいは構造物として転用されるものが多数であるが、Ⅲ-①区西部で出土した空風輪(1)・水輪(3)・地輪(4)は、花の丸造成盛土下の自然堆積層から近接した状況で出土しており、火輪は確認されていないものの、中世の五輪塔がそのまま埋没した可能性が想定される。またⅢ-②区で出土した(2)・(5)は、平らな面を上に向けて盛土に据えられており、近世以降に礎石として転用された状況が推察される。今回の調査では記銘を有する石造物は確認されていないため、五輪塔の造立趣旨・制作年代等は定かではないが、石造物は松代城本丸石垣の裏込め石や御殿礎石としても転用されているため、築城以前に周辺に五輪塔等を造立する場が存在した可能性が高い。



出土石製品一覧表

番号	出土地点			石製品内容		石材	寸法 (cm)			備考
	地区	遺物番号	出土層位	種別	部位・形状		タテ	ヨコ1	ヨコ2	
1	Ⅲ-①	45	自然堆積	五輪塔	空風輪	安山岩(青目)	22.0	15.0	12.5	
2	Ⅲ-②	38	二次堆積	五輪塔	火輪	凝灰岩?	12.0	11.5	20.0	礎石転用か
3	Ⅲ-①	45	自然堆積	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	13.5	15.5	21.0	
4	Ⅲ-①	45	自然堆積	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	14.0	21.0	21.5	
5	Ⅲ-②	43	盛土	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	15.0	19.0	19.0	礎石転用か

寸法の「タテ」は製品の高さを示し、「ヨコ1」「ヨコ2」は部位ごとに異なる。以下「各部位(ヨコ1:ヨコ2)」。
 空風輪(空輪最大径:風輪最大径)、火輪(上部辺:下部辺)、
 水輪(上部径:最大径)、地輪(前部辺:側部辺)

第Ⅳ章 結語

第1節 花の丸御殿の推定位置

松代城の南西に位置する花の丸には、明和7年（1770）に5代藩主である真田幸弘によって、本丸から御殿が移されたとされる。以後、花の丸御殿は政務の場、藩主の居住域として利用されることとなるが、明治の廃城後には周囲の堀が埋没し、鉄道路線整備や宅地化によって花の丸の曲輪範囲でさえも視認できない状況であった。平成4～6年度に神田川改修にともなう発掘調査が実施され、旧千曲川筋を利用した百間堀や花の丸を外周する堀の一部が確認されたが、花の丸御殿に関連する遺構は確認されなかった。今回の調査では、石垣や堆積土層から花の丸曲輪の詳細な範囲が検出されたことに加え、御殿礎石と思われる石材が複数確認されたことにより、花の丸御殿範囲を推定することが可能となった。

花の丸御殿については、これまでに数点の指図が確認されている。そのうち、描かれた年号が示されているものは文化3年（1806）の写しと記された「花之御丸表御殿御絵図面」（真田宝物館所蔵）と万延元年（1860）の「花御丸御殿向御普請図」（長野市立博物館所蔵）、「花御丸御殿向御普請図面」（長野県立歴史館所蔵）のみである。「花之御丸表御殿御絵図面」は御殿のうち主に政務の場である表御殿について記したものであり、玄関や正面の広間などの大部分は万延元年の絵図と一致するが、詳細を比較すると一部異なる部位が確認できる。また万延元年の絵図には、多数の張り紙があり、花の丸御殿が江戸末期においても増改築を繰り返していた状況がうかがえる。また明治7年（1874）に描かれた「花ノ丸御殿下地割図」には御殿の名残とみられる外周の堀や池とともに敷地割りが記されており、現在の道路や調査成果と一致する。

今回の調査では、はじめて花の丸御殿のものと想定される礎石が数点検出されたが、調査位置が狭小であるため、検出礎石から具体的な御殿建物を推定することは困難な状況である。しかし、これまでの調査成果に加え、新たに検出された石垣や堆積土層の見解、絵図との比較から、花の丸の曲輪位置については、推察することが可能となった。ここでは、現存する花の丸御殿指図のうち、堀や外周水路、庭園（池）などを記した「花御丸御殿絵図面」（松代小学校所蔵）の写し（トレース）図を調査成果に重ね合わせることにより、現況における花の丸御殿の位置を推定する。ただし、この図はあくまでも推定される花の丸曲輪と数点の礎石検出状況に基づいて絵図を重ねたものであり、絵図記載内容の精査や今後の発掘調査によっては多少異なる可能性は否めない。現時点では、今回の調査によって既設道路下であっても花の丸御殿遺構は残存していることが判明したことを重要な成果とした上で、現存する花の丸御殿遺構の保全を進めるための資料として、推定位置を提示することとする。今後、この花の丸地区が、国史跡に指定されている松代城跡の本丸および二の丸の一部と同一の歴史的財産として、後世に受け継いでいくための保全策が求められている。

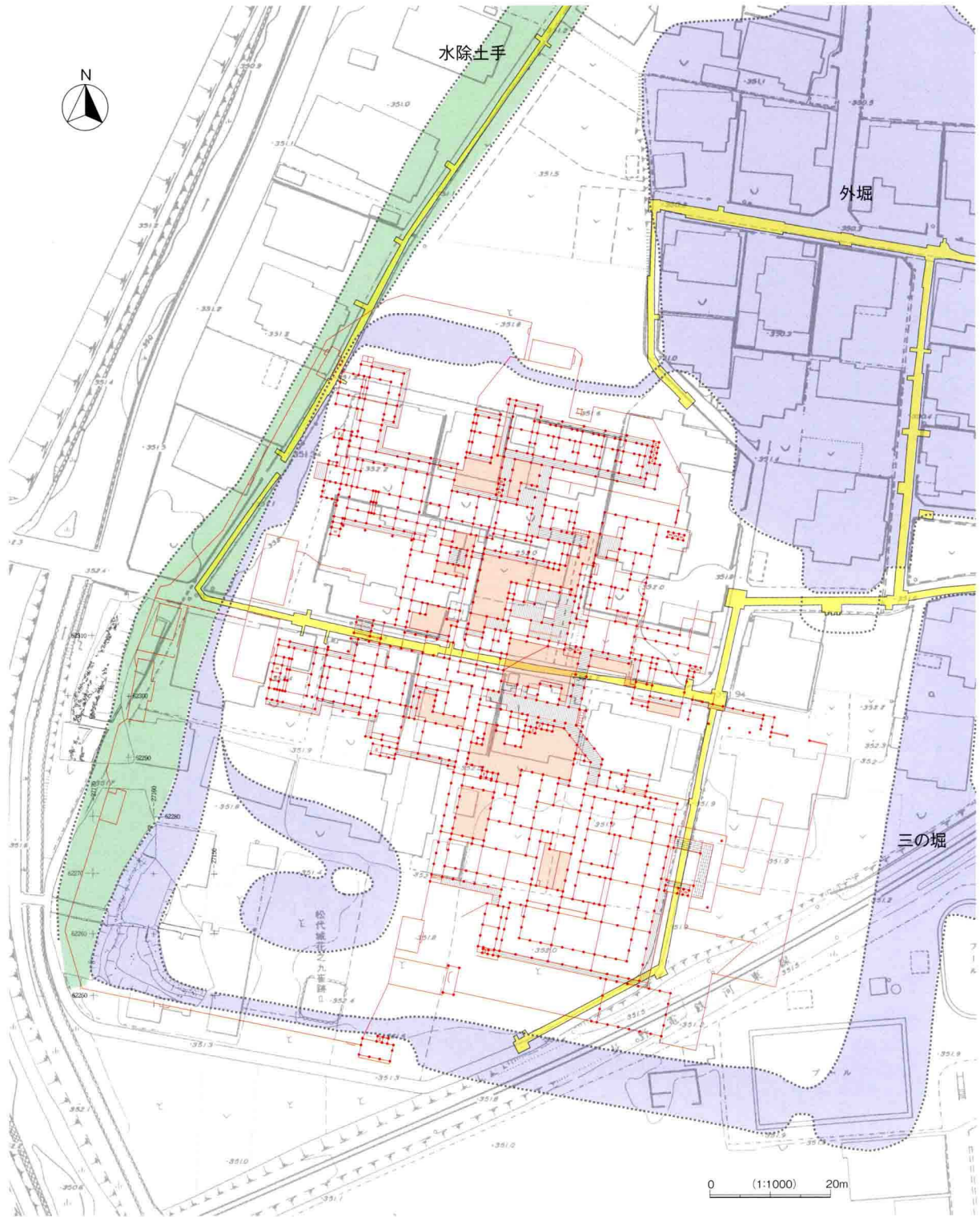
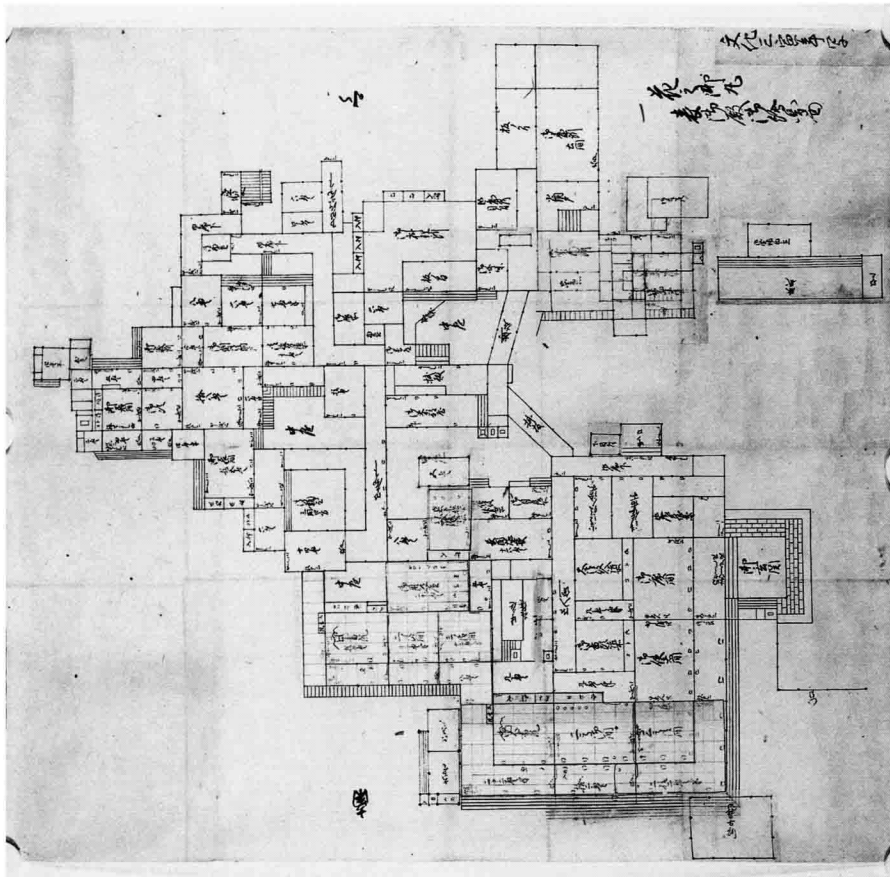
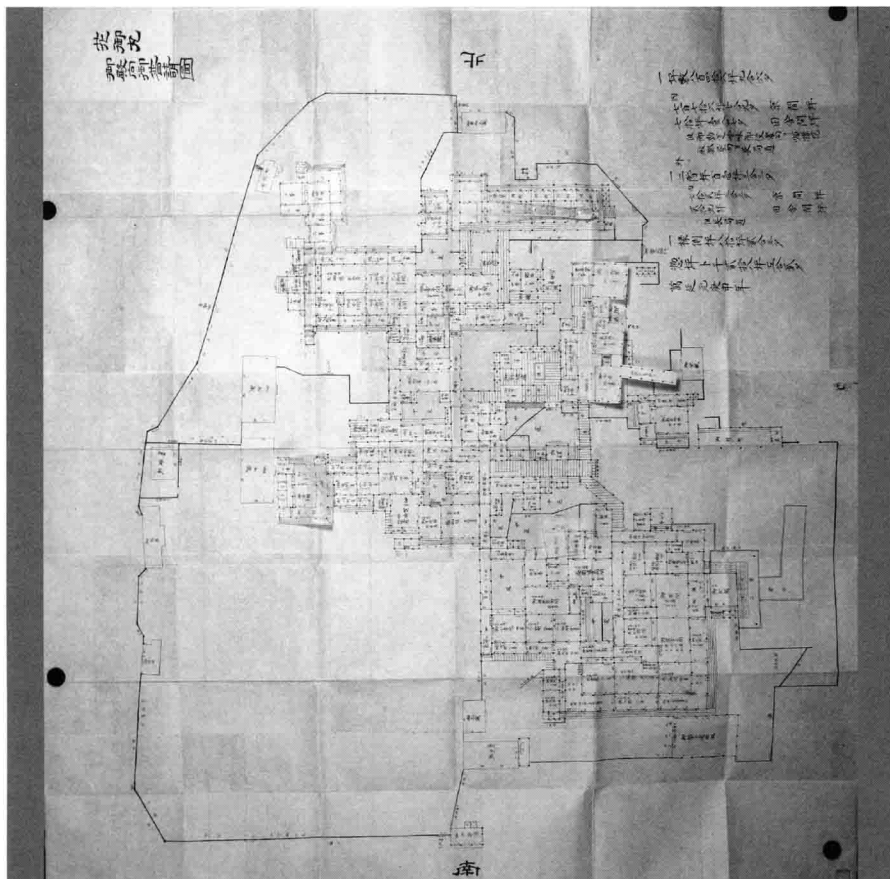


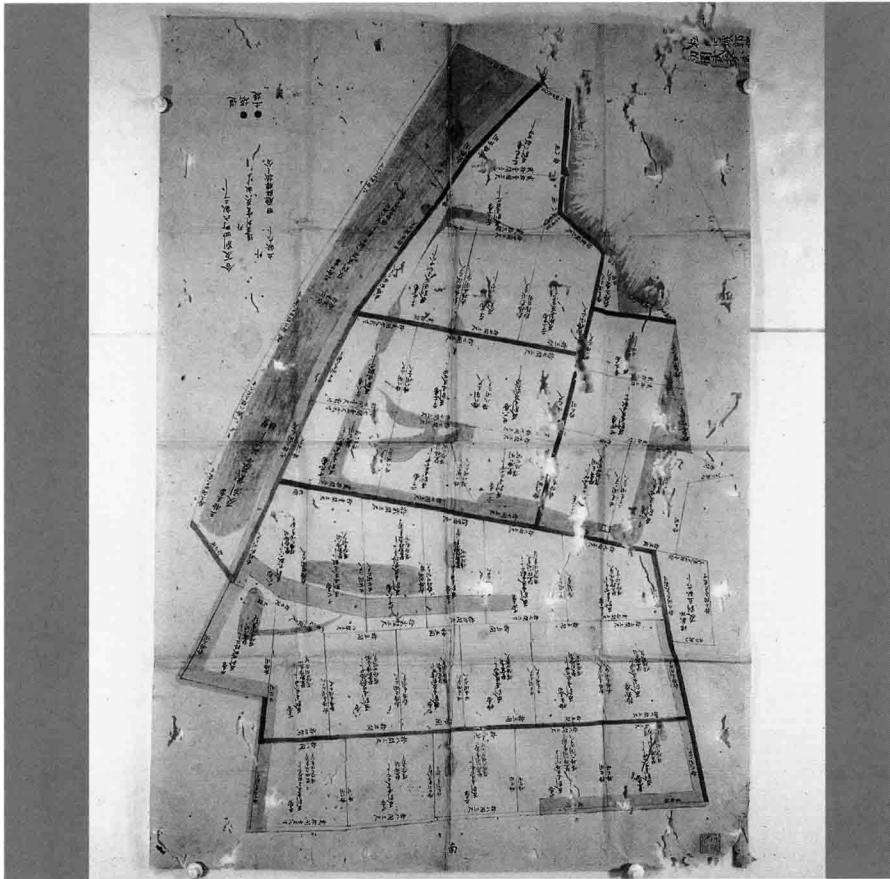
図13 花の丸御殿推定図



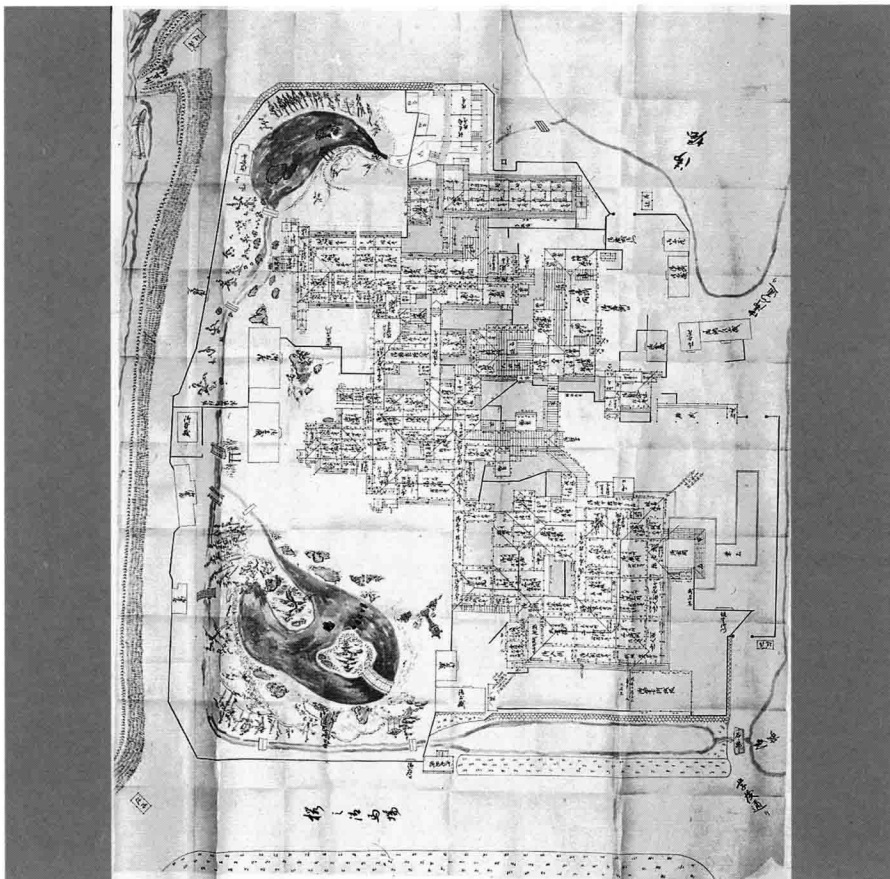
「花之御丸表御殿御絵図」
真田宝物館所蔵



「花御丸御殿向御絵図」
長野市立博物館所蔵



「花ノ丸御殿私下地割図」
松代公民館所蔵



「花御丸御殿絵図面」
松代小学校所蔵

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 2001 『飯田城下町遺跡』
- 飯山市教育委員会 2002a 『飯山城下情報センター敷地内遺跡』飯山市埋蔵文化財調査報告 第65集
- 飯山市教育委員会 2002b 『長野県史跡飯山城跡遺構確認調査報告』飯山市埋蔵文化財調査報告 第67集
- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房
- 江戸東京博物館編 1993 『江戸東京博物館総合案内』財団法人江戸東京歴史財団
- 大塚初重ほか 1994 『八百八町の考古学』シンポジウム江戸を掘る 山川出版社
- 大橋康二編 1988 「肥前磁器の変遷図」『別冊太陽 古伊万里』日本のこころ63 平凡社
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 大橋康二 2000 「九州陶磁概論」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念 図録
- 大橋康二 1995 「建築史からみた発掘資料」『季刊考古学』第53号 特集—江戸時代の発掘と文化 雄山閣出版
- 北原糸子 1999 『江戸城外堀物語』ちくま新書209 筑摩書房
- 北村 保 1987 「松代藩士の見聞録にみる江戸後期の松代城下町」『松代』—真田の歴史と文化—創刊号 真田宝物館
- 北村 保 1992 「近世松代火難雑考」『松代』—真田の歴史と文化— 第5号 真田宝物館
- 北村 保 1993 「享保二年松代城類火焼失録」『松代』—真田の歴史と文化— 第6号 真田宝物館
- 古泉 弘 1983 『江戸を掘る』—近世考古学への招待— 柏書房
- 古泉 弘 1985 「江戸の街の出土遺物 —その展望—」『季刊考古学』第13号 特集●江戸時代を掘る 雄山閣出版
- 古泉 弘 1987 『江戸の考古学』考古学ライブラリー48 ニュー・サイエンス社
- 佐々木達夫 1985 「物資の流れ —江戸の陶磁器—」『季刊考古学』第13号 特集●江戸時代を掘る 雄山閣出版
- 寒川典昭・山下伊千造・南志郎 1992 「千曲川下流の歴史洪水の復元と考察」『土木史研究』第12号
- 信州大学工学部建築工学科松本研究室 1984 『長野市松代三町伝統環境保存計画策定調査報告書』
- 新宿区内藤町遺跡調査会ほか 1992 『内藤町遺跡』
- 竹内誠監修 2002 『ビジュアルガイド江戸時代館』全1巻 小学館
- 田中誠三郎 1979 『真田一族と家臣団 —その系譜をさぐる—』信濃路
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1998 『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
- 東京都教育委員会 1991 『東京の遺跡展 —お江戸八百八町地下探険—』図録
- 長野市教育委員会 1982 『庭園都市 松代』伝統的建造物群保存対策調査報告書
- 長野市教育委員会 1984 『潤いのある庭園都市づくり』
- 長野市教育委員会 1995 『松代城跡 —国補神田川改修事業地点—』長野市の埋蔵文化財第73集
- 長野市教育委員会 2005 『松代城下町跡 ～中木町・西木町・紺屋町～』長野市の埋蔵文化財第109集
- 長野市教育委員会 2005 『松代城下町跡（2）～殿町～』長野市の埋蔵文化財第110集
- 長野市教育委員会 2006 『松代城下町跡（3）～殿町～』長野市の埋蔵文化財第114集
- 長浜文化財シンポジウム実行委員会 2000 『近世城下町の諸相』シンポジウム発表資料
- 日本貨幣商協同組合 2001 『日本貨幣カタログ』
- 林英夫・青木美智男編 2001 『事典 しらべる江戸時代』柏書房
- 降矢哲男 2001 「甲信地方における肥前陶磁の出土状況について」『国内出土の肥前陶磁』第11回九州近世陶磁学会資料
- 本田博太郎 1970 『松代町の民家』長野県教育委員会
- 松代藩文化施設管理事務所 1999 『城下町松代』真田宝物館開館三〇周年記念 特別展図録
- 松本市 1989 『史跡松本城北外堀外側土塁発掘調査報告書』
- 松本市教育委員会 1989a 『史跡松本城黒門枳形内発掘調査報告書』
- 松本市教育委員会 1989b 『松本市城西馬出遺跡緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告書No.79
- 松本市教育委員会 1996 『松本城下町跡 伊勢町—近世・町屋跡の発掘調査—』松本市文化財調査報告書No.122
- 松本市教育委員会 1997 『松本城下町跡 伊勢町第8・9・12次、本町第1・2次』—平成8年度試掘調査報告書— 松本市文化財調査報告書No.129
- 松本市教育委員会 2000 『松本城下町 本町第5次、伊勢町第19・21・22次、中町第1・2次、宮村町第1次』—平成10・11年度試掘調査報告書— 松本市文化財調査報告書No.149
- 松本市教育委員会 2001 『松本城下町 伊勢町第23・24・25次』—平成12年度試掘調査報告書— 松本市文化財調査報告書No.154
- 丸山岩三 1990 「寛保2年の千曲川洪水に関する研究（1）～（4）」『水利科学』第34巻第1～4号
- 山田啓一・田辺淳 1985 「千曲川における寛保2年（1742）8月大洪水の考察」『第5回日本土木史研究発表会論文集』

報告書抄録

ふりがな	まつしろじょうあと						
書名	松代城跡(3)						
副書名	流域松代幹線系花の丸汚水準幹線事業地点						
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財						
シリーズ番号	第124集						
編著者名	宿野隆史・小林由実						
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター						
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106						
発行年月日	2009(平成21)年3月27日						
印刷所	鬼灯書籍株式会社(〒381-0012 長野市柳原2133-5 TEL 026-244-0235)						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
まつしろじょうあと 松代城跡	ながのけんながのしまつしろまひまつしろ 長野県長野市松代町松代 16~47、265~277	20201	F-202	36° 33' 51"	138° 11' 39"	20080512) 20080918	1.060mi
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
松代城跡	城跡	江戸時代	石垣、礎石、外堀 など	陶磁器、土器・土製品、石 製品(五輪塔)など			
要約	松代城跡花の丸想定地内において、下水道建設に伴う遺跡の確認調査を実施した。調査では、石垣や堀跡を確認し、堆積土層から花の丸曲輪地が推定された。また花の丸御殿の礎石と想定される石材も数点確認することができた。						

長野市の埋蔵文化財 発掘調査報告書一覧

1968年	第1集	『信濃長原古墳群』	1995年	第67集	『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡Ⅱ』
1976年	第2集	『浅川西条』	第68集	『栗田城跡(3)』	
1978年	第3集	『中村遺跡』	第69集	『浅川扇状地遺跡群 徳間本堂原遺跡』	
	第4集	『塩崎遺跡群』	第70集	『八幡田沖遺跡』	
1979年	第5集	『塩崎遺跡群(2)』	第71集	『浅川扇状地遺跡群 ニツ宮遺跡(2)・吉田町東遺跡』	
1980年	第6集	『三輪遺跡 - 付水内坐一元神社遺跡』	第72集	『塩崎遺跡群(8)・石川条里遺跡(9)』	
	第7集	『田中沖遺跡』	第73集	『松代城跡』	
	第8集	『篠ノ井遺跡群』	第74集	『松代城跡Ⅱ』	
	第9集	『四ツ屋遺跡 (第1～3次)・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』	1996年	第75集	『浅川扇状地遺跡群 吉田四ツ屋遺跡・三輪遺跡(6)・棗河原遺跡』
1981年	第10集	『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』	第76集	『浅川扇状地遺跡群 駒沢城跡・小島柳原遺跡群 中俣遺跡Ⅲ』	
	第11集	『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』	第77集	『浅川扇状地遺跡群 松ノ木田遺跡』	
1982年	第12集	『浅川扇状地遺跡群 - 牟礼バイパスA・E地点』	第78集	『布施塚1号古墳・2号古墳』	
1983年	第13集	『浅川扇状地遺跡群 迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』	1997年	第79集	『柏尾南遺跡』
1984年	第14集	『石川条里的遺構(2)・上駒沢遺跡』	第80集	『小島・柳原遺跡群 水内坐一元神社遺跡Ⅱ』	
	第15集	『箱清水遺跡(2)』	第81集	『裾花川扇状地遺跡群 村南遺跡』	
1985年	第16集	『石川条里的遺構(3)・(付上駒沢遺跡)』	第82集	『浅川扇状地遺跡群 松ノ木田遺跡Ⅱ』	
1986年	第17集	『浅川扇状地遺跡群 - 牟礼バイパスB・C・D地点』	第83集	『下箕ヶ谷遺跡』	
	第18集	『塩崎遺跡群Ⅳ 市道松節 - 小田井神社地点遺跡』	第84集	『浅川扇状地遺跡群 吉田古屋敷遺跡』	
1987年	第19集	『土口将軍塚古墳 - 重要遺跡確認緊急調査 -』	第85集	『上九反遺跡』	
	第20集	『三輪遺跡(2)』	第86集	『裾花川扇状地遺跡群 寺村遺跡』	
	第21集	『芹田小学校遺跡』	1998年	第87集	『長野遺跡群 西町遺跡』
	第22集	『長野吉田高校グランド遺跡』	第88集	『小島柳原遺跡群 水内坐一元神社遺跡Ⅲ』	
1988年	第23集	『横田遺跡群 富士宮遺跡』	第89集	『裾花川扇状地遺跡群 尾張城跡』	
	第24集	『塩崎遺跡群Ⅴ 殿屋敷遺跡』	第90集	『西前山古墳』	
	第25集	『小島柳原遺跡群 南川向遺跡』	第91集	『裾花川扇状地遺跡群 西方遺跡・中沢城館跡』	
	第26集	『東番場遺跡』	第92集	『松原遺跡Ⅴ』	
	第27集	『小柴見城跡』	第93集	『棗河原遺跡(2)・田中沖遺跡Ⅲ』	
	第28集	『宮崎遺跡』	第94集	『浅川扇状地遺跡群 小板屋遺跡』	
	第29集	『浅川扇状地遺跡群 浅川端遺跡』	1999年	第95集	『綿内遺跡群 高野遺跡』
	第30集	『地附山古墳群』	2000年	第96集	『南宮遺跡Ⅱ』(第1分冊・遺構編)
	第31集	『町川田遺跡』	2001年	第96集	『南宮遺跡Ⅱ』(第2分冊・遺物編)
1989年	第32集	『中条遺跡』	第97集	『長野吉田高校グランド遺跡Ⅱ』	
	第33集	『鶴前遺跡』	第98集	『川田氏館跡・岩崎遺跡Ⅱ』	
	第34集	『石川条里遺跡(4)』	第99集	『浅川扇状地遺跡群 徳間榎田遺跡』	
	第35集	『篠ノ井遺跡群Ⅱ』	2002年	第96集	『南宮遺跡Ⅱ』(第3分冊・写真編)
1990年	第36集	『屋地遺跡Ⅱ』	第100集	『四ツ屋遺跡Ⅱ』	
	第37集	『篠ノ井遺跡群Ⅲ』	第101集	『篠ノ井遺跡群(5)』	
1991年	第38集	『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』	2003年	第102集	『浅川端遺跡(2)・差出遺跡 三合塚西古墳・石川条里遺跡(10)』
	第39集	『塩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)』	2004年	第103集	『篠ノ井南条遺跡・浅川扇状地遺跡群 辰巳池遺跡・本郷前遺跡』
	第40集	『松原遺跡』	第104集	『浅川扇状地遺跡群 天神木遺跡・桶爪遺跡・権現堂遺跡』	
	第41集	『小島柳原遺跡群 中俣遺跡・浅川扇状地遺跡群 押鐘遺跡・檀田遺跡』	第105集	『浅川扇状地遺跡群 檀田遺跡(2)』	
1992年	第42集	『田中沖遺跡Ⅱ』	2005年	第106集	『綿内遺跡群 南条遺跡』
	第43集	『南宮遺跡』	第107集	『裾花川扇状地遺跡群 西方遺跡(2)』	
	第44集	『塩崎遺跡群(7)』	第108集	『浅川扇状地遺跡群 桐原宮西遺跡・権現堂遺跡(2)・吉田古屋敷遺跡(2)・返日遺跡』	
	第45集	『石川条里遺跡(6)』	第109集	『松代城下町跡』	
	第46集	『篠ノ井遺跡群(4)』	第110集	『松代城下町跡(2)』	
	第47集	『浅川扇状地遺跡群 ニツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』(2分冊)	第111集	『石川条里遺跡(11)・浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡(3)・上長畑遺跡』	
	第48集	『小島柳原遺跡群 中俣遺跡Ⅱ』	2006年	第112集	『浅川扇状地遺跡群 吉田町東遺跡(2)』
1993年	第49集	『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(4)』	第113集	『小島・柳原遺跡群 水内坐一元神社遺跡(4)』	
	第50集	『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡』	第114集	『松代城下町跡(3)』	
	第51集	『松原遺跡Ⅱ』	第115集	『善光寺門前町跡』	
	第52集	『田牧居婦遺跡』	2007年	第116集	『平林東沖遺跡』
	第53集	『岩崎遺跡』	第117集	『篠ノ井遺跡群(6)』	
	第54集	『古町遺跡 流人塚』	第118集	『吉田古屋敷遺跡(3)』	
	第55集	『浅川扇状地遺跡群 駒沢新町遺跡Ⅱ』	第119集	『吉田古屋敷遺跡(4)・田牧居婦遺跡(2)』	
	第56集	『上見林遺跡』	2008年	第120集	『吉田古屋敷遺跡(5)』
	第57集	『石川条里遺跡(7)』	第121集	『元善町遺跡・善光寺門前町跡(2)』	
	第58集	『松原遺跡Ⅲ』	第122集	『浅川扇状地遺跡群 ニツ宮遺跡(3)・浅川端遺跡(3)』	
	第59集	『史跡松代藩主真田家墓所』	2009年	第123集	『元善町遺跡(2)』
1994年	第60集	『猪平遺跡・宮ノ下遺跡』			
	第61集	『栗田城跡(2)』			
	第62集	『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(5)・小島柳原遺跡群 上中島遺跡』			
	第63集	『松原遺跡Ⅳ』			
	第64集	『小島柳原遺跡群 宮西遺跡』			
	第65集	『浅川扇状地遺跡群 牟礼バイパスB地点遺跡(2)』			
	第66集	『石川条里遺跡(8)』			

長野市の埋蔵文化財第124集

松代城跡(3)

—流域松代幹線系花の丸汚水準幹線事業地点—

平成21年3月19日 印刷

平成21年3月27日 発行

発行 長野市教育委員会
編集 文化財課埋蔵文化財センター
印刷 鬼灯書籍株式会社